余部遺跡(その１)発掘調査概要・II

－府営美原南余部住宅建替に伴う発掘調査－

1999・3

大阪府教育委員会

はしがき

美原町域を東西に貫く近畿自動車道の建設に先立つ調査によって、河内鋳物師の伝承ともかかわる中世村落の様子が、あきらかになったことはまだ記憶に新しいと思います。その後この道路を挟んだ南と北で府営住宅の建て替え事業がすすめられ、それに伴って発掘調査がおこなわれてきました。その結果、狭山池から北流する西除川下流域の中世の村落について、さらに新たな事実を確認することができるようになってきています。

この概要報告書では、昨年度から継続している府営美原南余部住宅の建替えに伴う埋蔵文化財の発掘調査の結果について報告しています。特に、現在の南余部の旧村落の前身とも考えられる中世村落の一画と、農業用水を確保していたと思われます旧西除川の分流の跡、そしてそれが埋まり、貯水池が形づくられていく様子が分かりました。わたしたちが今なお周辺で見かける池が、かつては川の流れ路であったこともはっきりしました。このような昔の景観が今の生活道路の曲がり角や交差点にまでも面影をとどめ、住民の日常生活の中に溶け込んだ親しみぶかさをかもしだしています。

今回の調査は地元の方々のご理解、ご協力を得て、行うことができました。また、関係機関の方々にも多くの協力をいただきました。これからも本府文化財保護行政に対し、一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成11年3月

大阪府教育委員会文化財保護課長
鹿野　一美

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府建築都市部の依頼により府営美原南余部住宅建替えに伴い実施した余部遺跡（その１）－平成10年度－の発掘調査概要報告書である。

2．調査地は、大阪府南河内郡美原町南余部281番地外である。

3．現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第１係技師枡本哲を担当者として、平成10年７月７日着手し、平成11年３月31日終了した。

4．本書で使用した方位は座標北を示し、標高はすべてTP（東京湾標準潮位）表示値である。

5．本書の執筆・編集は枡本が担当した。

目　　次

はしがき
例言
本文目次
挿図目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第２章　調査の方法 …… 1
第３章　調査の成果 …… 3
　１．基本層序 …… 3
　２．F区の遺構と遺物 …… 4
　３．G区の遺構と遺物 …… 9
　４．H区の遺構と遺物 …… 11
第４章　まとめ …… 41

挿 図 目 次

第１図　調査区位置図
第２図　調査区地区割図
第３図　調査区土層全体図
第４図　Ｆ・Ｇ区遺構全体図
第５図　Ｇ区建物103平面・断面図
第６図　Ｇ区建物104平面・断面図
第７図　Ｇ区溝439遺物出土状態・出土遺物図
第８図　Ｇ区土坑435遺物出土状態・出土遺物図
第９図　Ｇ区土坑478遺物出土状態・出土遺物図
第10図　Ｈ区遺構全体図
第11図　Ｈ区溝627遺物出土位置・出土遺物図
第12図　Ｈ区建物105平面・断面図
第13図　Ｈ区建物106平面・断面図
第14図　Ｈ区建物107平面・断面図
第15図　Ｈ区建物108平面・断面図
第16図　Ｈ区建物109平面・断面図
第17図　Ｈ区井戸721平面・断面図
第18図　Ｈ区井戸721出土遺物図
第19図　Ｈ区井戸805平面・断面・出土遺物図
第20図　Ｈ区井戸871平面・断面・出土遺物図
第21図　Ｈ区井戸1237平面・断面・出土遺物図
第22図　Ｈ区土坑慕687平面・断面・出土遺物図
第23図　Ｈ区溝断面図
第24図　Ｈ区土坑断面図
第25図　Ｈ区土坑1181平面・断面・出土遺物図
第26図　Ｈ区土坑1231平面・断面・出土遺物図
第27図　Ｈ区土坑1244平面・断面・出土遺物図
第28図　Ｈ区落ち込み1191遺物出土位置図
第29図　Ｈ区落ち込み1191出土遺物図
第30図　Ｈ区ピット1117平面・断面・出土遺物図
第31図　Ｈ区ピット1140平面・断面・出土遺物図
第32図　Ｈ区集石627平面・断面・出土遺物図
第33図　Ｈ区旧河川堆積土層図
第34図　検出遺構と地籍との関係図
第35図　調査区の土地利用の変遷模式図

余部遺跡（その１）第２次発掘調査概要

第１章　調査の経緯と経過（第１図）

府営美原南余部住宅建て替え事業に伴う一連の発掘調査も本年度で一応の区切りとなる年度を迎えた。既に過去10年余りの調査の結果を引き継ぎ、大阪府都市建築部住宅建設課との協議を経て、昨年度のD、E調査区の北部と東部で総面積約7600㎡について調査を展開した。

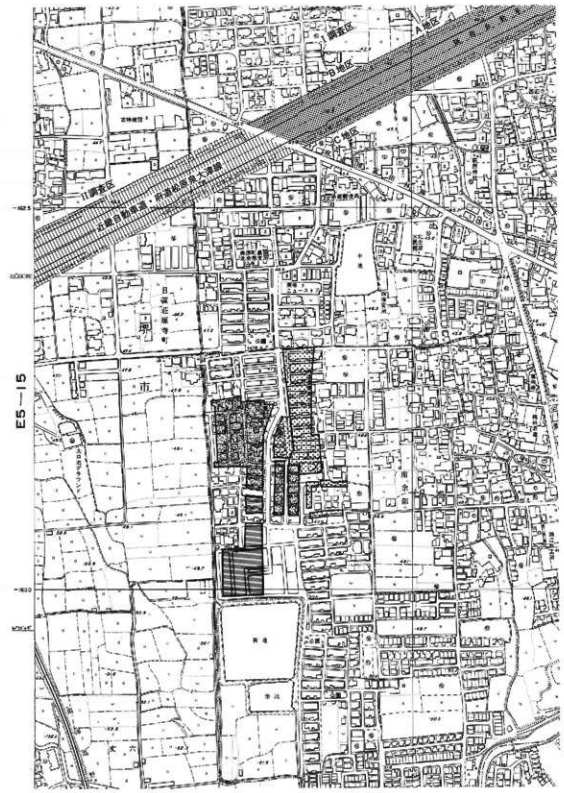
調査は建設工事が急がれる個所を優先して行うこととし、まず平成10年７月27日より昨年度のE調査区の東隣に設定したG区より機械掘削を開始し、８月４日からはその南の私道を挟んだF区も並行して掘削を始め、さらに９月７日からは今年度の主要調査区であるH区の掘削にも取りかかった。ただし、H調査区は建設工事の進入路かつ住民の生活道路を確保する必要から３分割して実施する（H１～３区）こととなり、調査の終了した時点で順次各種建設工事が始められた。台風７号の襲来や度重なる雨天続きで調査は思うようにはかどらなかったが、10月30日には第１回の航空測量を実施でき、建設工事の工程にも大きな支障を及ぼすことなくF～H１調査区までの作業を終えた。この頃には前年度のE調査区で検出されただけであった掘立柱建物や井戸などの生活遺構がさらに東へ、また北へ拡がることが判明し、D調査区で検出された旧河川の流跡も単純に北流するのではなく、いったん東に大きく蛇行したのち再び北に向かうこと、そしてこの河川を挟んだ南と北では遺構の内容ががらりと変わること、などが分かってきた。

第２回の航空測量は明けて平成11年１月12日にH調査区の残りの主要部（H２調査区）を対象として実施した。この時点で旧河川の左岸の状況が浮かび上がってきた。これによって急を要していた貯水池個所の建設工事が遅滞なく進められる運びとなった。次いで３月９日に行った第３回目の航空測量をもってH調査区最終部（H３区）の主な調査を完了し、若干の補足調査を経て、３月末に平成10年度の現地調査を完了した。

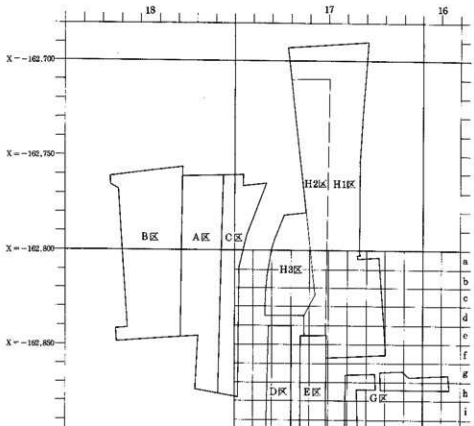
第２章　調査の方法（第２図）

調査方法は昨年度実施された方法に則り、調査区名は前回に続けてF～H区と呼称し、遺構名は各調査区の中で通し番号を付した。F調査区は300番代、G調査区は400番代、H調査区は500番代より開始した。遺構番号は、たとえば同じ溝の連続であっても検出された部分すべてに番号を付している。したがって本文中ではそれらの溝の番号をすべて並記してひとつの溝であることを示した。

調査は住宅の建設時の盛り土や住宅撤去時の瓦礫、それらの下に残る耕作土を機械で掘削した後、以下の包含層を人力にて掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。ただし、H３区の河川堆積土をすべて人力で掘削することはせず、一部を機械にて行った。


E5－15
1調査区
A地区
C地区
11調査区
堺
市
0
300m
1994年度大阪府埋蔵文化財協会調査区
1997年度大阪府教育委員会調査区
1998年度大阪府教育委員会調査区

第１図　調査区位置図



第２図　調査区地区割図（Ｓ＝1/2000）（Ａ～Ｅ区は平成９年度調査区）

遺物の取り上げ、検出された遺構の位置表示は国土座標の区画大Ｅ－４－16、Ｈ～Ｉ－17～19を基本にした10m区画を用いた。

第３章　調査の成果

１．基本層序（第３図）

昨年度の調査結果を踏まえて、これまでの調査区全体の現地表面、包含層上面および地山上面レベルを比較してみると以下の高低差が得られる。南北方向ではＥ区南端とＨ区北端で現状地盤については1.8m、包含層上面レベルについては1.7m、遺構検出面の地山レベルでは1.9mの比高差をもって北に低くなる。また東西方向ではＢ区からＧ区についてみてみると、現地表面では高低差はあまり認められないが、包含層上面では0.3m、地山上面では0.05～0.1mと若干東に傾

斜する。したがって調査区全体をみれば、北への傾斜は東へのそれよりもはるかに大きい比高差を生じている。それには河川の下刻による影響も大きかったと考えられ、たとえば地山面では1m北行する毎に概ね11cmの比高をもって北に傾斜することになる。

包含層は、昨年度と同様に本年度の調査でも南端では希薄もしくは認められない部分がある。このことから府営住宅建設以前の耕作地の原形を形作ったと考えられる開墾が、13世紀以降の中世には大規模に行われた。このために古墳時代の土坑や溝、また中世包含層に混入する埴輪片や石鏃などの遺物によって推し量られる中世以前の遺構はかなり削平され、消滅したと思われる。

中世包含層は基本的に中世の耕作土の床土とみられる細い黄色帯とその上に重なる灰褐色系の粘質土のセットによって数層に分層されるが、大きな時期差はほとんど認められず、13世紀中頃以降の土器類を主体とする点は、昨年度の調査結果と変わりない。その内容は瓦器、陶磁器を始めとする中世遺物に加えて、サヌカイト製石鏃、埴輪、須恵器、土師器など中世以前の遺物も若干混入する。また、河川堆積層でも包含層と同様の遺物が検出され、包含層の形成と河川の埋没が共に進んだとみられる。

2．F区の遺構と遺物（第4図）

調査対象区域の南端に位置する調査区で、東西方向の長方形となり、発掘面積は301.2㎡を測る。中世遺物包含層を除いて、耕作溝、轍の跡が検出されている。主な遺構の特徴は以下の通りである。

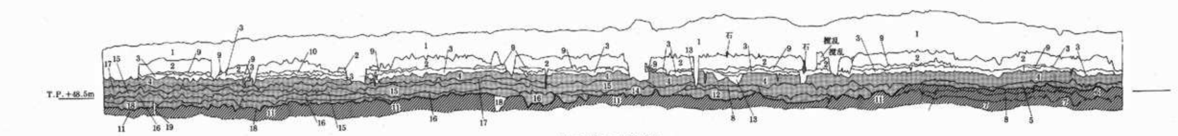
溝333・334　調査区の中央よりで検出された南北方向の溝である。いずれも幅0.63～0.75m、深さ0.03～0.08mを測る。方向はN－5°－W（溝333）、N－3°－W（334）。埋土は黄色（5Y7/6）粘質土で、出土遺物としては溝333より瓦器椀片、土師質羽釜体部片、土師器片、サヌカイト片が出土している。瓦器椀には粗く太いミガキが認められる。

溝355　調査区西半で検出された南東～北西方向の溝で、座標北との触れはN－38°Wあり、他の溝の方向とは違っている。幅0.23～0.45m、深さ0.04～0.08mを測る。埋土は浅黄色（7.5Y7/3）粘質土である。出土遺物としては古式土師器甕と思われる摩滅した破片がある。

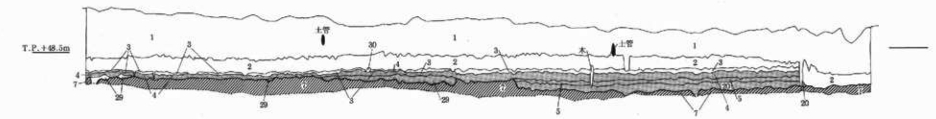
溝360・361　調査区の西端で検出された南北方向に平行する溝である。幅0.06～0.14m、深さ0.06～0.14mを測る。方向はN－2°－W。埋土は浅黄色（7.5Y7/3）砂質土である。両溝の間隔は1.9mと一定している。これらの溝の続きは北側のG区南端で検出されている。

轍跡　調査区全体にわたって検出された幅0.05～0.08m（検出時）、深さ0.05～0.08m、埋土が明灰色微砂の2条一対の細溝状の痕跡である。他の溝とは方向や規模、埋土の質に違いがある。それぞれの轍の座標北に対する偏角、間隔は以下のようになる。

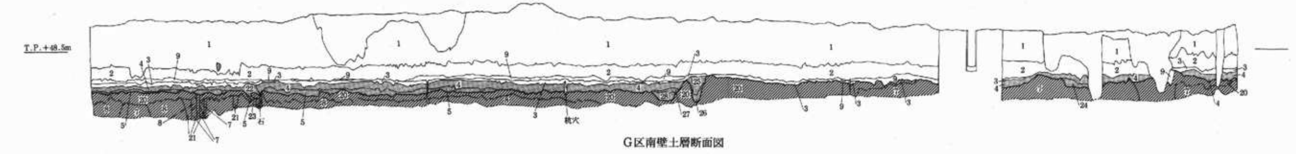
轍跡300・301	N－18°－E	1.1m
轍跡311・315	N－36°－E	1.0～1.1m



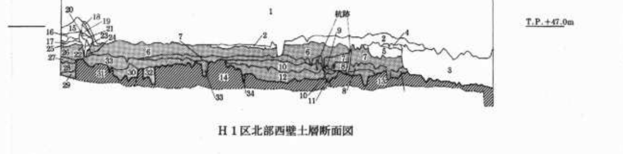
F区北壁土層断面図



G区西壁土層断面図



G区南壁土層断面図



H１区北部西壁土層断面図

F区北壁断面土層名

① 山土盛土
② 灰 7.5Y 6/1（耕土）
③ 橙 7.5YR 6/8（床土）
④ 黄 5Y 7/6 砂質土（耕土）〔包含層①〕
⑤ 明黄褐 2.5Y 7/6 砂質土（床土）〔包含層②〕
⑥ 淡黄 5Y 8/4 砂質土（マンガン粒沈着）（地山）
⑦ 浅黄 5Y 7/3 砂礫含（地山）
⑧ 淡黄 5Y 8/4 粘質土
⑨ 灰白 10Y 8/2 砂質土（旧耕土）
⑩ 灰白 5Y 7/1 粘質土
⑪ 明黄褐 2.5Y 7/6 礫混じりの粘質土
⑫ 浅黄 2.5Y 7/3 礫混じりの粘質土
⑬ 灰白 5Y 8/1 旧耕土と床土の混じった土
⑭ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑮ 黄 5Y 7/6 粘質土（マンガン粒沈着）
⑯ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑰ 黄 2.5Y 8/6 粘質土
⑱ 浅黄 7.5Y 7/3 粘質土
⑲ 灰白 10Y 8/1 粘質シルト

G区西壁断面土層名

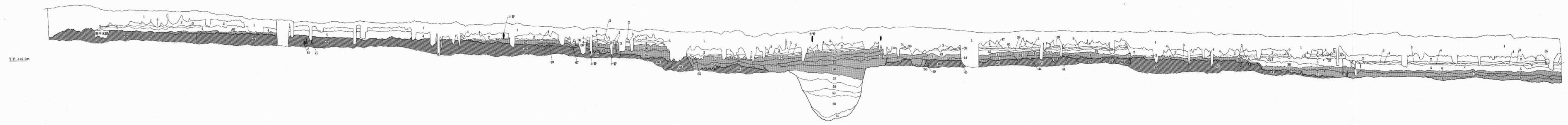
① 山土盛土
② 灰 7.5Y 6/1（耕土）
③ 橙 7.5YR 6/8（床土）
④ 黄 5Y 7/6 砂質土（耕土）（包含層①）
⑤ 明黄褐 2.5Y 7/6 砂質土（床土）（包含層②）
⑥ 淡黄 5Y 8/4 砂質土（マンガン粒沈着）（地山）
⑦ 浅黄 5Y 7/3 砂礫含（地山）
⑧ 淡黄 5Y 8/4 粘質土
⑨ 灰白 10Y 8/2 砂質土（旧耕土）
⑩ 灰白 5Y 7/1 粘質土
⑪ 明黄褐 2.5Y 7/6 礫混じりの粘質土
⑫ 浅黄 2.5Y 7/3 礫混じりの粘質土
⑬ 灰白 5Y 8/1 旧耕土と床土の混じった土
⑭ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑮ 黄 5Y 7/6 粘質土（マンガン粒沈着）
⑯ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑰ 黄 2.5Y 8/6 粘質土
⑱ 浅黄 7.5Y 7/3 粘質土
⑲ 灰白 10Y 8/1 粘質シルト
⑳ 暗灰黄 2.5Y 5/2 粘質土
（マンガン粒沈着）（中世包含層）
㉑ 暗灰黄 2.5Y 5/2 粘質土
㉒ 灰白 7.5Y 7/2 砂質土
㉓ オリーブ黄 7.5Y 6/3 砂質土
㉔ 黄橙 10Y 7/8 砂礫混じり粘質土
㉕ 浅黄 5Y 7/3 砂質土
㉖ 灰 5Y 6/1 粘質土
㉗ 灰白 5Y 7/1 砂質土
㉘ 灰白 5Y 7/2 砂質土
㉙ 黄 5Y 8/6 砂質土
㉚ 灰黄 2.5Y 7/2 砂質土

G区南壁断面土層名

① 山土盛土
② 灰 7.5Y 6/1（耕土）
③ 橙 7.5YR 6/8（床土）
④ 黄 5Y 7/6 砂質土（耕土）（包含層①）
⑤ 明黄褐 2.5Y 7/6 砂質土（床土）（包含層②）
⑥ 淡黄 5Y 8/4 砂質土（マンガン粒沈着）（地山）
⑦ 浅黄 5Y 7/3 砂礫含（地山）
⑧ 淡黄 5Y 8/4 粘質土
⑨ 灰白 10Y 8/2 砂質土（旧耕土）
⑩ 灰白 5Y 7/1 粘質土
⑪ 明黄褐 2.5Y 7/6 礫混じりの粘質土
⑫ 浅黄 2.5Y 7/3 礫混じりの粘質土
⑬ 灰白 5Y 8/1 旧耕土と床土の混じった土
⑭ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑮ 黄 5Y 7/6 粘質土（マンガン粒沈着）
⑯ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質土
⑰ 黄 2.5Y 8/6 粘質土
⑱ 浅黄 7.5Y 7/3 粘質土
⑲ 灰白 10Y 8/1 粘質シルト
⑳ 暗灰黄 2.5Y 5/2 粘質土（マンガン粒沈着）
㉑ 暗灰黄 2.5Y 5/2 粘質土
㉒ 灰白 7.5Y 7/2 砂質土
㉓ オリーブ黄 7.5Y 6/3 砂質土
㉔ 黄橙 10Y 7/8 砂礫混じり粘質土
㉕ 浅黄 5Y 7/3 砂質土
㉖ 灰 5Y 6/1 粘質土
㉗ 灰白 5Y 7/1 砂質土
㉘ 灰白 5Y 7/2 砂質土

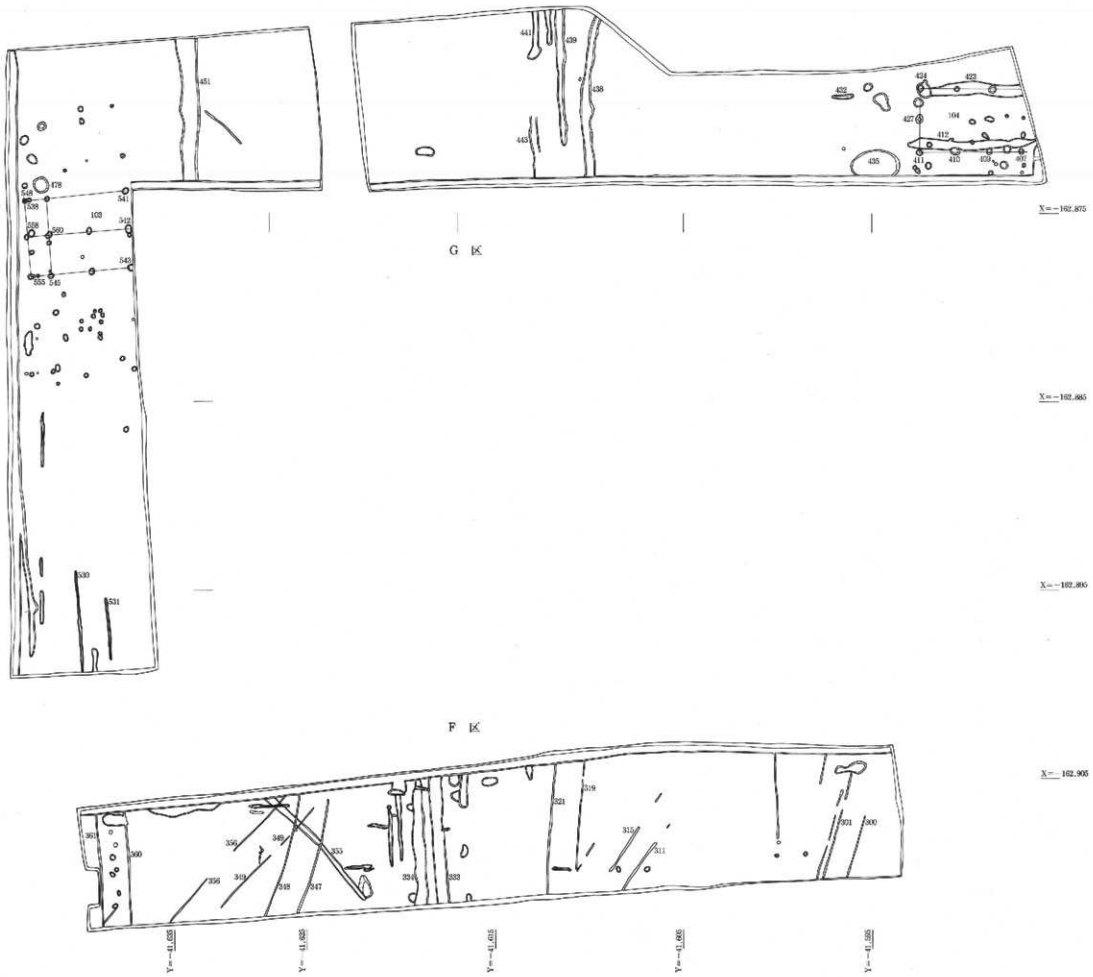
H１区西壁断面土層名

① 盛土及び旧水路埋戻土
② 灰 7.5Y 4/1（耕土or水路埋土）
③ 黒 N 2/ ～灰 N 6/ 細砂（近世南北水路？）
④ 灰白 2.5GY 8/1 粘質ブロック土（床土or水路ウラ込土）
⑤ 灰 7.5Y 6/1 砂質、礫混
⑥ 灰 7.5Y 5/1 砂質
⑦ 灰白 5Y 7/1 砂質
⑧ 明黄褐 2.5Y 7/6 粗砂
⑨ 淡黄 2.5Y 8/4 中砂
⑩ 灰黄 2.5Y 7/2 シルト
⑪ 灰白 7.5Y 7/1 粘質
⑫ 灰黄 2.5Y 7/2 砂礫
⑬ 灰 N 5/ 粘土
⑭ 黄橙 10YR 8/8 粘土、礫混（地山）
⑮ 灰 2.5Y 5/1 砂質（耕土）
⑯ 灰 2.5Y 6/1 砂質（耕土２）
⑰ 灰白 2.5Y 8/1 砂質（耕土３）
⑱ 灰 2.5Y 6/1 砂質
⑲ 灰黄 2.5Y 7/2 砂質
⑳ 淡黄 5Y 8/3 粘質
㉑ 灰黄 2.5Y 7/2 砂混砂
㉒ 灰黄 2.5Y 7/1 砂質
㉓ 黄灰 2.5Y 5/1 砂質
㉔ 灰 10Y 5/1 砂質
㉕ 橙 7.5YR 6/8 砂質（床土）
㉖ 褐灰 10YR 6/1（包含層）
㉗ 明黄褐 2.5Y 6/6 粘質
㉘ オリーブ黄 5Y 6/4 粘質
㉙ 灰 5Y 6/1 砂混粘質
㉚ 灰オリーブ 5Y 6/3 砂質
㉛ 灰 10Y 5/1 粘土
㉜ 灰 10Y 6/1 砂混粘土
㉝ 浅黄 5Y 7/3 粘質
㉞ 灰 10Y 5/1 粘土
35. オリーブ黒 5Y 3/2 粘質
36. オリーブ褐色 2.5Y 4/4 土
37. オリーブ色 5Y 5/4 土
38.
39. 灰オリーブ色 5Y 6/2 砂質（石多く含む）
40. 赤褐色 5YR 4/8 粘質
41. 黄褐色 10YR 5/6 粘土
42. 黄褐色 2.5Y 5/3 （明黄褐色 10YR 6/8 3割まだらに入る）
43. 灰黄色 2.5Y 7/2 粘質（明黄褐色 2.5Y 6/8 砂質
黄橙色 10YR 7/8 石が多量に混じる）
44. 黄褐色 2.5Y 5/4 粘質土
45. 黄褐色 10YR 5/8 粘質土
46. にぶい黄 2.5Y 6/4 粘土（灰色 5Y 6/1 砂質混じり）
47. 灰色 5Y 4/1 砂質
48. 灰オリーブ色 7.5Y 6/2 粘質土（明黄褐色 10YR 6/8 粘土５割混じる）
49. にぶい黄 2.5Y 6/4 粗砂
50. 黄褐色 2.5Y 5/6 （にぶい黄 2.5Y 6/3 5割混じる）
51. オリーブ褐色 2.5Y 4/6 粘土
52. 灰白 2.5Y 7/1 粘質土
53. 灰白 7.5Y 7/2 粘質土
54. 浅黄 5Y 7/3 粘質土
55. 灰黄 2.5Y 7/1 粘質土（マンガン粒沈着）
56. 灰黄 2.5Y 7/2 粘質土
（砂混じり鉱物沈着顕著、表面明褐 7.5YR 5/8 呈する）
57. 灰 5Y 6/1 粘土
（鉱物（黄橙 7.5Y 7/8）沈着のため垂直状のはん文）
58. 灰 10Y 5/1 粘土
59. 灰白 10Y 6/1 粗砂
60. 灰 7.5Y 4/1 粘土
61. 明緑灰 10GY 8/1 細砂
62. 明緑灰 7.5GY 8/1 粗砂（礫まじり）（地山）
63. 灰黄 2.5Y 7/2 粘質土（マンガン粒沈着）
64. 黄 2.5Y 8/6 粘土 砂まじり（地山）
65. ２と４の混じり
66. 灰白 10Y 8/2 粘質土
67. 灰黄 2.5Y 7/2 粘質土（マンガン粒沈着）
68. 黄 2.5Y 8/8 粘土（地山）
69. 浅黄 2.5Y 7/3 粘質土



H１区西壁土層断面図

第３図　調査区土層全体図



第4図　F・G区遺構全体図

轍跡319・321	N－3°－E	1.4m
轍跡347・348	N－38°－E	1.4m
轍跡349・356	N－45°－E	1.4～1.5m

間隔からみれば1.0～1.1mと1.4～1.5mの広狭がある。前回の調査ではA・B区で方向、規模、埋土が近い轍跡が検出されているが、全て幅広のものであった。

3．G区の遺構と遺物（第4図）

F区北側に接して設けられた南北34m、東西50mの調査区で、面積は564m²を測る。東西部分は現用水路で分断されている。この水路を越えて東11mのところでは中世包含層下で比高0.15mの段差を測る東側一帯の削平が認められ、また南壁から3.5m～4.0mより北側も同様に削平されていた。これら削平による段下の区域は段上に比べて出水が多く、特に東端ではそれが激しかった。しかしそのような立地の違いにもかかわらず南北部分と東西部分で建物跡が1棟ずつ検出されている。その他溝、土坑などの遺構も認められた。

建物103（第5図）　調査区南北部分の北半で検出された。南北2間（4.1m）、東西2間（4.3m）以上を測る東西方向の建物で、西側に半間分（1.1m）ほどが取り付く。面積は22.4m²以上になる。この半間部分に当たるピット538と548には重複がみられるので、据え直しがあったと考えられる。建物の主軸方向はN－80°である。柱穴間は東西で2.15m、南北で1.9～2.15mを測る。軒出し部分ではピット538、555、558で画される古い時期の柱間寸法は東西0.7～095m、新しい時期のものは1.0～1.2mを測り、若干長く出している。柱穴堀り方は径0.2m～0.4mのほぼ円形であり、深さは0.09m～0.42mを測る。柱根の残るものはみられなかったが、ピット541、542では柱痕の部分に炭、焼土の混入が認められ、後者では根石が残っていた。他のピットは全て抜き取り後の埋土が観察された。

柱穴のうちピット541、543では土師質羽釜体部片、545、560では瓦器椀片が、558ではこれに青磁椀片、また542、545では硬化した炉壁片が出土している。ここでは比較的大きい破片のピット560出土の椀（1）を図示した。内底面に太く粗いラセン暗文を施し、外面にはミガキがなく、指オサエのままである。口径13.7㎝、器高4.3㎝。

建物104（第6図）　東西部分の東端の溝412・423に断ち切られる形で検出された。南北2間（3.4m）、東西3間（5.4m）以上を測る東西方向の建物で、主軸方向はN－85°－Eである。柱穴間は1.7m～1.9m測り、平均1.82mとなる。面積は19.25m²以上になる。柱穴堀方は径0.29m～0.37mのほぼ円形であるが、ピット410だけが広く0.56mとなるのは、断面観察から見て設置時点での位置合わせによるためか、あるいは後のやり替えによるものではないか。柱穴の深さは0.41m～0.6m。ピット407，411，424，427には柱根が残り、ピット409では柱根下に瓦器椀の破

片が4枚重ねの状態で検出されている。ピット411，424では柱の固定を補強するためこれに接して置かれたと思われる10cm大の石が認められた。また柱の抜き取りが観察されたピット409，410の埋め戻し土には石が投棄されていた。

柱穴ではピット407、409、411で瓦器椀片が出土している。瓦器は太く粗いミガキを施している。また407、410では壁土片が出土している。

溝412・423　調査区東端で検出された東西に平行する溝である。両溝の間隔は2.0～2.4m。溝412は幅0.14～0.64m、深さ0.03～0.07m、溝423は幅0.44～0.72m、深さ0.03～0.07mを測り、埋土は412が灰褐色（10YR6/2）粘質土、423が浅黄色（2.5Y7/3）粘質土である。方向はN－85°－E。出土遺物では、溝412から瓦器椀底部片、土師器羽釜体部片、溝423では瓦器、土師器の細片が出土している。これらの溝は建物104と重複していて、建物の埋没後の掘り込みである。溝432は423のわずかな痕跡であろう。

溝438　溝439の東側に平行する南北溝であるが、北半でやや東に緩やかに向きを変え、N－8°－Eの振れがある。幅0.32～0.76m、深さ0.07～0.12mを測り、埋土は第1層が灰白色（5Y7/1）砂質土、第2層が灰白色（5Y7/2）砂質土である。

溝439（第7図）　溝443の東側に平行する南北溝である。南半ではこの溝の西肩だけを残し、東肩は東側一帯の地下げにより削平されている。また北半も地下げにより削平されているので、大半が溝の底面だけが残る形となった。その北半の底面部分では幅0.14m、深さ0.02mを測り、埋土は南壁断面での観察によると、第1層が浅黄色（5Y7/3）粘質土、第2層が灰色（5Y6/1）粘質土である。方向はN－3°－W。南半で残った西肩から溝内に流れ込む灰の堆積がみられ、その中から土師器皿3点がまとまって出土した。

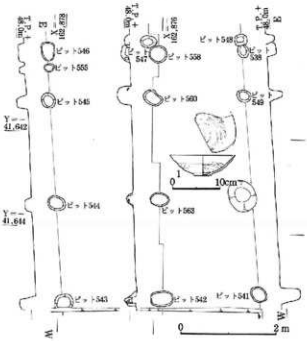
出土遺物　土師器小皿は口径7.5cm、器高1.1～1.3cmを測る淡橙色軟質の器で、口縁部外面が面をなす。中皿は口径15.0cm、器高3.0cmで、口縁部がやや外反気味にのびる淡橙色軟質で、砂粒の混入が多い。

溝441・443　一連の南北溝である。北半は地下げによって削平されている。幅0.32～0.54m、深さ0.05～0.06m、座標北を指し、埋土は鉄分の沈着する灰黄色（2.5Y7/2）粘質土である。

溝451　現用水路に平行してその西約6mのところに掘り込まれた幅0.80～1.14m、深さ0.07～0.12mの南北溝である。方向は座標北に一致する。北半は地下げにより削平され底面だけが残る。埋土は灰色（5Y6/1）粘質土である。

溝530・531　この平行する溝はF区西端で検出した南北溝（360・361）に連続する。幅0.12～0.20m、深さ0.03～0.04mを測る。方向はN－3°－W。埋土や両溝の間隔も同じである。しかし北に向かって浅くなり、後世の削平により断ち消えている。

土坑435（第8図）　建物104の西南側に掘り込まれている。径2.6mのほぼ円形と思われるが、南半は調査区外に及んでいる。深さは0.07mで、埋土は3層に分層された。第2層より瓦器小皿がまとまって出土した。他には土師器細片がある。

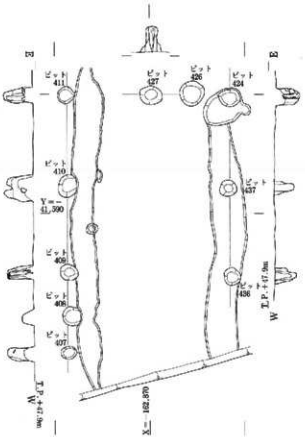


第５図　Ｇ区建物103平面・断面図

出土遺物　ここでは瓦器小皿を図示した。口縁端部が外反気味に上方にのびる形態である。５は口径8.4cm、器高2.0cm、６は口径8.1～9.0cm、器高1.9～2.0cmで内底面に粗く太い暗文を施し、周囲にも粗いミガキをかけるもの、７は口径9.2cm、器高1.9cmを測る。５、７の２点はやや軟質である。

土坑478（第９図）　建物103の西北隅に接して掘り込まれたほぼ円形の土坑である。径0.8m～0.85m、深さ0.1mを測る。埋土は上下２層に分かれ、上層では焼土、灰のレンズ状堆積が観察された。また下層の灰褐色土を除去する過程で瓦器、土師器皿の破片が出土し、底面では瓦器椀１個体と比較的大きい破片の土師器小皿、瓦器皿、土師器羽釜体部～底部片、須恵器鉢片が10cm大の石とともに出土している。

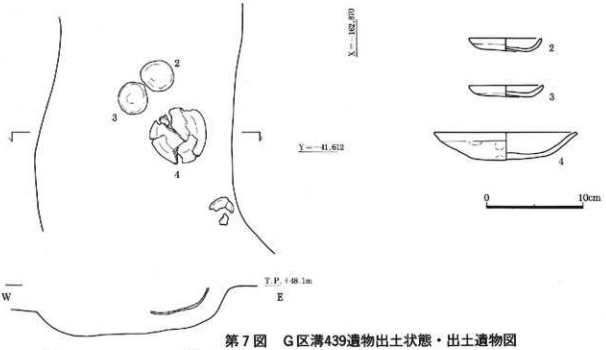
出土遺物　ここでは瓦器椀、土師器小皿を図示した。８は口径15.6cm、器高4.5cm、９は口径15.7cm、器高4.4cmを測る。８の内底面には粗く太い平行暗文が認められる。外面はいずれも指オサエのままでミガキ調整はみられない。瓦器椀編年Ⅲ－３期の器と思われる小皿は口径8.1～8.4cm、器高1.3cmの淡橙色で、口縁端部は内傾気味に終わる。



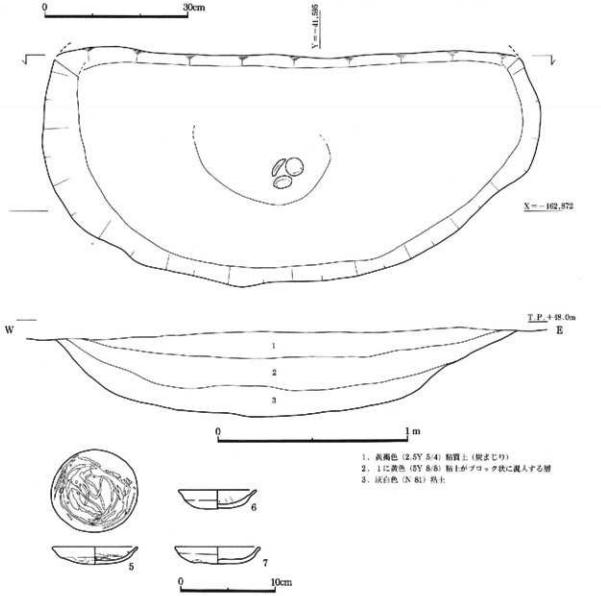
第６図　Ｇ区建物104平面・断面図

４．Ｈ区の遺構と遺物（第10図）

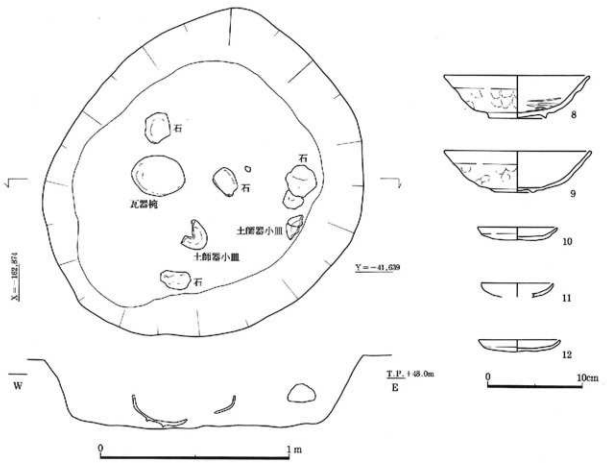
Ｇ区と前回の調査区Ｅ区の北側に広がる、南北延長170mにわたる面積5570㎡の調査区である。調査区北半では前回のＤ区で南北方向に検出された河川跡が連続し、中世ではこの河川跡を挟んで、南半は建物、井戸、道路の側溝、土坑墓など地割りにしたがったまとまりある生活域であり、北半は不定形な落ち込みや、自然地



第7図　G区溝439遺物出土状態・出土遺物図



第8図　G区土坑435遺物出土状態・出土遺物図



第９図　G区土坑478遺物出土状態図

形を利用した溝群など生産域、つまり耕作地となっている。また中世以前の遺構は河川も含め、全て自然地形に左右された溝である。

中世以前と以後については明確な時期を把握できる遺構・遺物はほとんどない。したがって以前をかりに古代、以後を単に中世以降と便宜的に分けている。また遺物の出土をみなくても、重複関係、層序関係、土質、掘り込み状態などからそのいずれかに帰属させたものもある。

古代の遺構と遺物

溝629・1087（第11図）　河川の蛇行部の西岸を斜めに横断する形に掘り込まれた幅0.83～1.78m、深さ0.23～0.56mの溝である。方向はN－23°－Eに振れる。北端は河岸の傾斜面に切り込むように流れ込んでいる。２ケ所の断面観察（第３図H区西壁断面図、第33図下段河川横断面図）に示したように、溝底面には粗い流砂の堆積があり、その後粘土質の堆積へと変化する。底面に近い粗砂からは摩滅した布留式土器の甕口縁部片、須恵器坏身片、基辺が三角形状を呈するサヌカイト製石鏃などが、それより上位の粘土質の土層では東側から投棄された状態の須恵器甕が溝肩近くで出土した。この溝は南端で中世の溝1085に断ち切られている。

出土遺物（第11図）　出土遺物のうちここでは溝の埋没時期を示すと思われる須恵器甕（13）を図示した。口縁部を欠失する。頸部にはやや崩れた波状文が巡るだけで他に文様帯はない。体

部最大径は球形のほぼ中央にあり、肩の張りはなくなだらかに下る。体部には外方から内方に向かって円孔が穿たれている。体部下半は不整方向にナデている。陶邑編年Ⅱ－２、３段階に相当し、６世紀中頃と考えられる。

溝641　上記の溝の西に沿う形で掘り込まれた幅0.32～0.54m、深さ0.10～0.17mを測る溝である。埋土は褐色粘土である。方向はN－9°－E、次いで北半はN－23°－Wと変化する。出土遺物はなかったが、上記溝と平行することや、埋土の土質からみて中世とは考えられない。溝1014もこの溝の連続と思われる。

溝924　調査区北部の河川流跡の右岸に流れ込む溝である。幅0.40～1.62m、深さ0.11～0.27mを測るが、自然地形の起伏にしたがって東から西へと流れた流跡で、N－75°－Wの振れがある。出土遺物はない。しかし埋土である暗褐色粘土の特徴から見て少なくとも中世の溝ではないので、古代の遺構として挙げておきたい。

溝1236　旧河川の左岸から西北～南北方向に、N－30°－Wの振れで流れ込む幅1.15m、深さ0.26mの溝である。埋土は５層に区分した。出土遺物はなかったが、土質や土色からみて、やはりこの時期に含めた。

中世の遺構と遺物

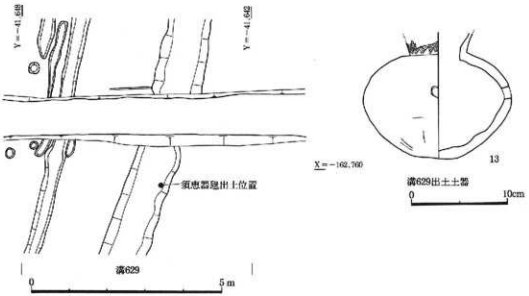
建物105（第12図）　本調査区の居住域と想定される河川以南の区域でもっとも北に位置する建物である。建物107の北に４m隔てて位置する２間（3.6m）×２間（4.0m）の総柱建物である。東側に若干の突出部が付く。面積は14.4㎡。柱穴掘り方は径0.2～0.28m、深さ0.16～0.36mで、柱間は1.65～2.0mを測る。軸方向は座標北に一致する。埋土は灰色粘土が主体であるが、ピット882では炭の混入が認められた。ピット877では瓦器細片、878では瓦器椀底部片が出土した。

建物106（第13図）　２間（3.2m）×４間（6.5m）の東西方向を主軸とする建物である。西側に1間（2.2m）×１間（2.3m）が取り付く。面積は22.75㎡。柱穴堀り方は径0.14m～0.33m、深さは0.08m～0.14mを測る。柱間寸法は桁行が2.0m～2.26m、梁行が1.5m～1.8mであるが、西側突出部は開きが大きく2.25mを測る。主軸はN－88°－E。ピット846からは瓦器椀片、840からは瓦器椀と土師器の破片が出土している。

建物107（第14図）　２間（3.2m）×５間（7.0m）の東西方向を主軸とする建物である。しかし南辺のピット２ケ所と東辺の１ケ所については検出し得なかった。面積は22.4㎡。柱穴掘り方は径0.16m～0.26m、深さ0.08m～0.33mである。主軸はN－92°－E。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.5m～1.65mで、桁行の東の１間分だけが2.15mと広い。南隣の建物106との間隔は1.3～1.4mである。ピット866より瓦器椀体部片が出土している。

建物108（第15図）　旧河川の流跡が南北方向から東に大きく蛇行する右岸で、落ち込み1191の底面で検出された。１間（1.05m～1.65m）×３間（4.5m～4.7m）の東西方向の建物で、主軸はN－85°－Eである。面積は６㎡を測る。柱掘り方の径は0.06m～0.2m、深さは0.04m～

第10図　H区遺構全体図

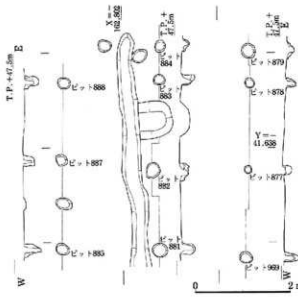


第11図　H区溝627遺物出土位置・出土遺物図

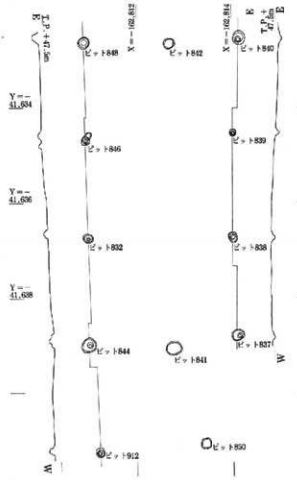
0.2mを測る。本調査区の他の建物の立地とは違い、河岸のやや低いところに掘り込まれている。規模、立地、周辺の遺構との位置関係などからみて住まいとは考えがたい。面積は約6㎡。河岸の段状の傾斜面の余地に合わせて建てられた仮小屋程度の施設と思われる。

建物109（第16図）　建物107から西に16m、また建物108から南へは11m隔て設けられた建物である。水路、ガス管などに断ち切られた状態で検出された。2間（3.8m～4.0m）×4間（7.8m～8.0m）の南北建物で、主軸はN－1°－E。柱穴掘り方は径0.23m～0.38m、深さ0.2m～0.47mを測る。柱間寸法は1.8m～2.05m。ピット1149を加えて総柱になる可能性もある。これまで検出された建物群の中で唯一南北方向に主軸をもつ建物である。柱穴掘り方より土師器、須恵器、瓦器などの細片が出土している。ピット1148では土師器羽釜鍔片と瓦器片、1139では瓦器小皿片、土師器細片、1131では瓦器小皿、椀口縁部、土師器羽釜鍔片、1132では内底面に平行暗文をとどめる瓦器椀底部片、赤褐色の土師器小皿、1215では土師器、須恵器細片、1214では器高1㎝程度の白色砂粒を多く含む赤褐色の土師器小皿、1212,1213では瓦器の細片が出土した。

井戸721（第17図）　建物106から南6mのところに掘り込まれている。溝722と重複し、掘り込み時期はそれに先行する。径2.40～2.65mの円形であり、深さは検出面から2.8mまで掘り下げている。検出面から0.8mまで擂り鉢状に掘り下げた後、さらに0.6mほど垂直に掘り、以下は胴張り状に掘り下げて平坦な底面としている。埋土は7層に分層できた。第1層上面で北宋銭元豊通寶（初鋳1078年、篆書体）1点が出土した。第1、2層では内底面に平行暗文を施す瓦器椀底部、小皿、底部から丸く短く立ち上がる口縁部の土師器小皿、外面タタキ目、内面を横方向のナデを施す須恵器甕、外面縄目タタキに斜め板ナデ、内面に細い布目痕のある平瓦が出土している。第3層では10～20㎝大の石が投棄され、これに瓦器椀片と、2層と同様の平瓦、陶器甕の破片が混在する。第4層では出土遺物は見られなかったが、それ以下では20㎝×30㎝大の石と瓦器椀が出土した。第5層では瓦器椀、小皿、茶釜形羽釜口縁部、「く」の字形に屈曲する土師質羽



第12図　H区建物105平面・断面図



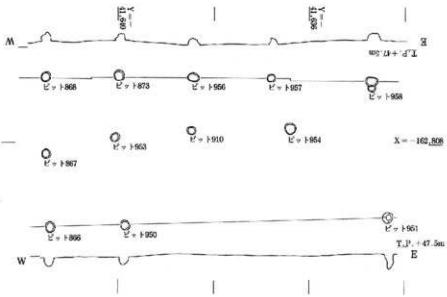
第13図　H区建物106平面・断面図

釜などの破片が出土した。第5層から6層にかけて外面タタキ目調整の東播系須恵器甕（22）が横倒しの状態で出土した。また断面が層状の淡赤褐色～暗赤紫色を呈する発泡状に硬化した熔壁片も出土した。第7層では斜格子や平行暗文の瓦器椀底部、須恵器鉢、外面横方向ナデ、内面細い布目痕をとどめる丸瓦片が出土した。なお、第5～7層では竹、木片などの植物遺体が混在していた。

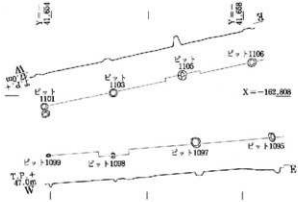
出土遺物（第18図）　ここでは第4層を中心に出土した瓦器椀（14～18）、小皿（19～21）、須恵器甕（22）、それに第1層出土の銭貨を図示した。瓦器椀は高台が低く、内底面に粗い平行暗文、周囲に太いミガキを粗雑に施し、外面は指オサエのままである。法量的には口径15cm前後から16cm、器高4cm前後から5cmを測る。しかしいずれにせよこれらの器が共に第7層から出土しているので、実際の使用に時間的な差はないようである。瓦器椀の編年では$\mathrm{III}-3$期に相当すると考えられる。元豊通寶（23）の法量は外径（縦）24.84mm、外径（横）24.98mm、内径（縦）20.98mm、内径（横）20.43mm、方孔の縦6.42～6.45mm、横6.24～6.45mm、厚さ1.29～1.37mm、重量3.4gを測る。

井戸805（第19図）　井戸721と建物106の中間、やや東に位置する。溝833と重複し、それより以前に掘り込まれている。径1.06～1.23mの円形で、検出面より0.9mまで掘削されている。埋土は6層に分層され、各層に土器片の混入が認められ、4層では凸面に粗い板ナデ、凹面に細い布目をとどめる平瓦片が出土した。

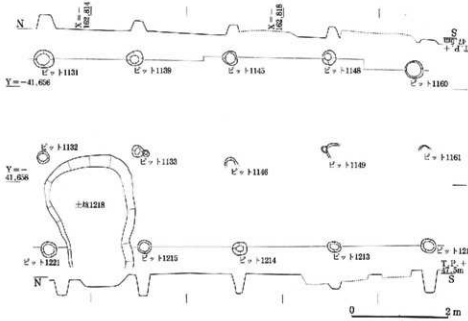
出土遺物　出土遺物のうち瓦器椀、土師器皿を図示する。瓦器椀は内底面に平行暗文を施し、周囲に密にミガキを重ねるもの（同図25,



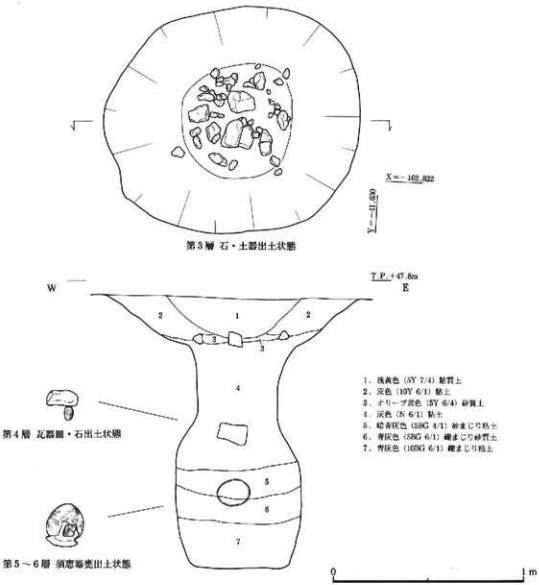
第14図　H区建物107平面・断面図



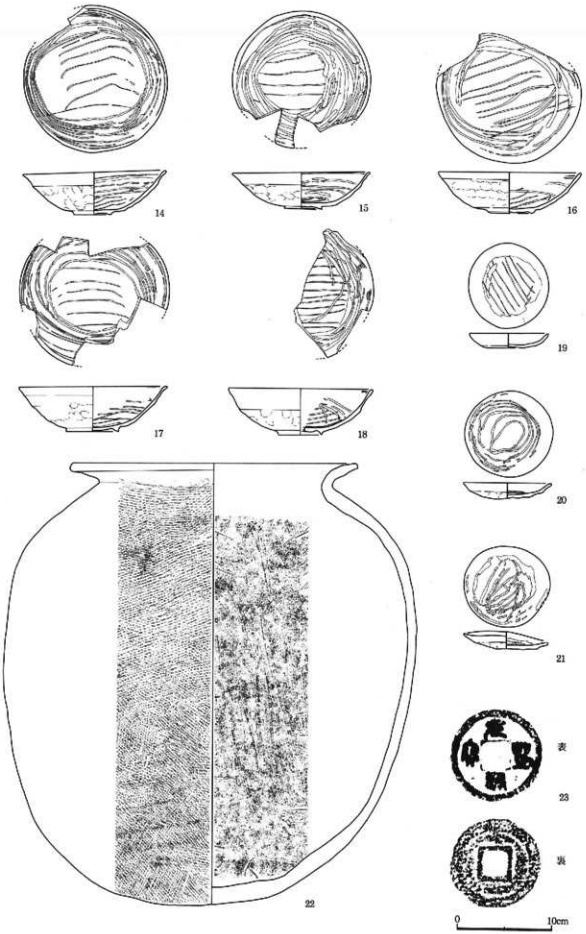
第15図　H区建物108平面・断面図



第16図　H区建物109平面・断面図



第17図　H区井戸721平面・断面図



第18図　H区井戸721出土遺物図

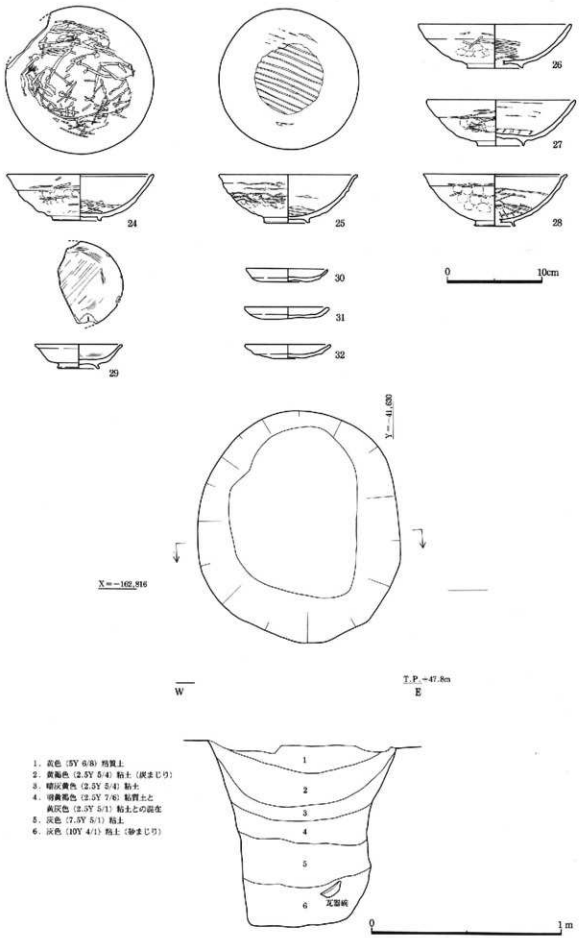
27）や、粗いミガキを施すもの（26, 28）、さらに不整方向に短い暗文を施すもの（24）がある。しかしいずれも外面は指オサエの後、上半部に粗いミガキを重ねている。口縁部の形態からみて大和型と思われるもの（24, 28）もある。椀の編年ではⅢ－２期に相当すると考えられる。小形椀（29）はしっかりとふんばる高台の付く形態で、内底面には繊細な平行暗文、周囲は数区に分けて密にミガキをかけている。体部外面は調整不明。土師器小皿は口径９㎝前後、器高1.2～1.5㎝の淡橙色（31, 32）、淡白灰色（30）の器で、前者には赤色物質を多量に含んでいる。

井戸871（第20図）　建物107の北西角に2.0m隔てて掘り込まれている。溝872と重複し、掘り込みはそれに先行する。径1.10～1.44mのほぼ円形で、検出面より－0.65mの砂礫層に掘り込まれている。炭灰の混入する第２層の暗褐色粘質土から瓦器、土師器、瓦などの破片が５～20㎝大の礫とともに出土した。この層では検出面より0.5m下と0.8～0.9m付近でこれらの遺物の集中的な投棄状態を観察した。しかし上下の土器片には相互に接合できる例があるので、投棄はほぼ同時に行われたであろう。

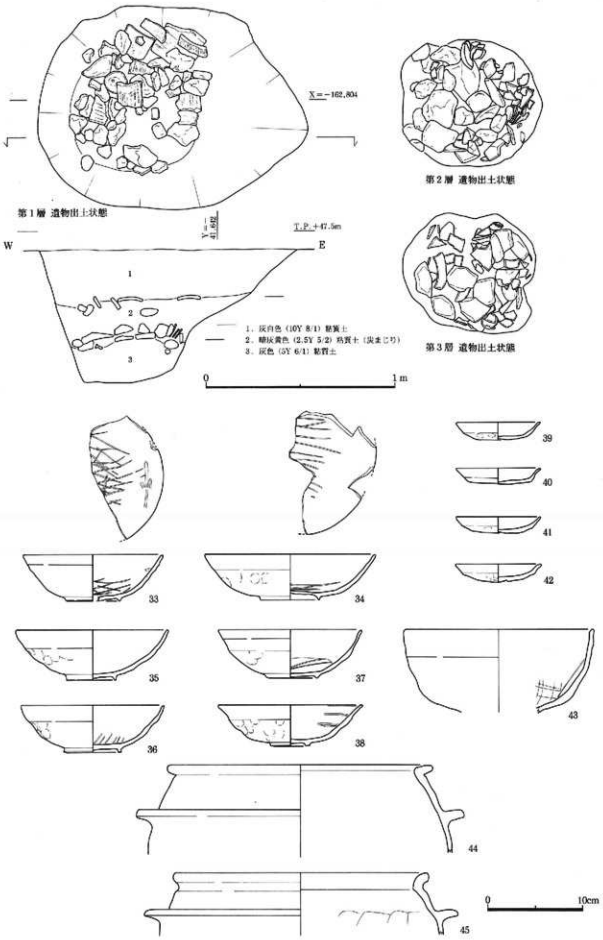
出土遺物　瓦器椀、土師器皿、羽釜、平瓦の破片がある。瓦器椀では内底面に平行、斜格子の暗文、外面上半部ミガキ、土師器皿では赤褐色、淡橙色の中小皿、羽釜では内傾する口縁部が「く」の字形に屈曲する形態が特徴である。平瓦は凸面板ナデ、縄目タタキ、さらに縄目タタキの後、板ナデを施すものがある。ここでは瓦器椀、皿、片口鉢、土師器羽釜を図示する。瓦器椀の大半は粗い平行暗文であるが、斜格子暗文のもの（33）もある。口径15～16㎝、器高4.4～5.3㎝を測るが、34は破片の復原では18.1㎝を得る。瓦器鉢（43）は片口の器と思われる。内底面には斜格子暗文を施している。

井戸1237（第21図）　Ｈ調査区の河川跡右岸の肩に掘り込まれ、建物109の西約６ｍで検出された。径0.9mのほぼ円形掘り方で、検出面より深さ1.2mまで垂直に掘り下げ、深さ1.7mまでなだらかにやや南側に突出する胴張り状に広げた後、今度は徐々に坑径を減じつつ、径0.5mの平坦な底面に達している。地山は検出面より－0.65mまで粘質土であるが、以下は硬い礫層である。埋土は11層に分れる。第１～３層では黄色系の砂質土、粘質土、第５層以下は灰色系の粘性の強い粘土となり、６層以下ではこれに粗砂、第９層ではさらに５～10㎝大の礫が混在する。枝、葉など植物遺体も混入している。第１～７層までは瓦器、土師器などの摩滅した細片が出土する程度であるが、第８層以下では瓦器椀、皿を主体とした比較的残りのよい大きい破片が各層で出土する。これらの瓦器椀には上下の層から出土した破片間で接合できる例があるので、埋土の堆積過程には時間の隔たりはないようである。第10～11層では曲げ物底板、側板の破片も出土している。

出土遺物　第８～11層で出土した土器類のほとんどが瓦器椀、次いで皿であり、土師器羽釜そして平瓦、瓦質甕の破片が少量ある。瓦器椀の内底面の暗文は平行が圧倒的であり、斜格子は少ない。平行暗文は細線と太線がみられる。外面のミガキは上半部を中心にした太いミガキと、口縁部のみに数条のミガキをかけるものがある。口縁端部形態に大和型とみられるものがある。高台は三角形から台形、さらにそれが歪んだものまであり、一定していない。焼成は十分に炭素



第19図　H区井戸805平面・断面・出土遺物図



第20図　H区井戸871平面・断面・出土遺物図

を吸着させた硬質なものばかりである。皿も椀の特徴に相応しい破片がある。小椀（49）は歪みがあり、口径8.0㎝、器高2.7㎝に復原した。内底面には粗い暗文、外面は指オサエのままでミガキはみられない。瓦質甕は外面に細かなタタキ目調整のある破片が第11層で1点出土している。第9層出土の土師器羽釜は口縁部が「く」の字形に外反する形態である。土師質皿の破片は第8，10層で数点出土している。前者は口縁部が底部からなだらかに移行する淡灰色の器で、後者は強い横ナデで低部と口縁部に明瞭な境をもつ淡橙色の器である。ここでは瓦器椀、小皿、土師質皿について図示した。椀の編年ではⅢ－2～3期とみられるが、既にⅣ期に入る椀（49）のような例もある。

土坑墓687（第22図）　調査区南半の建物106から南約8ｍ離れたところに掘り込まれた土坑墓である。溝689に西半が断ち切られている。規模は短軸0.8m、長軸1.4mの楕円形。埋土は3層に分層できる。土坑の北西肩から底面にかけて瓦器椀（58）1個体、白磁椀（59）1個体が前者を上にして重なって出土した。白磁椀の中には櫛、その下に北宋銭3枚が納められていた。銭貨は紐を方孔に通して結んでいたようで、祥符元寶と大觀通寶の1枚に紐の痕跡が認められた。

出土遺物　瓦器椀は内底面に粗い平行暗文、内面周囲に粗いミガキをかける器で、口径15.7㎝、器高4.6㎝を測る。瓦器椀編年ではⅢ－3期に相当すると考えられる。白磁椀はやや厚味のある器体に乳白色の釉薬を施している。口縁部外面ではこの釉薬の溜まりが垂下し、体部下半は素地のままとなっている。高台畳付けは磨いて、成形時の粗い素地を消している。このような特徴から13世紀第2四半期の器と考えられる。銭貨は腐蝕が進んで残りが悪いが、祥符元寶1点、大觀通寶2点と識別できた。櫛は現存長5.7㎝、幅0.8～1.5㎝を残し、かろうじて29本の櫛歯の付け根部分が残る状態である。以上のほかに小さい木片が櫛や銭貨とともにあったが、用途は不明である。銭貨を載せてあった薄板の可能性も考えられる。

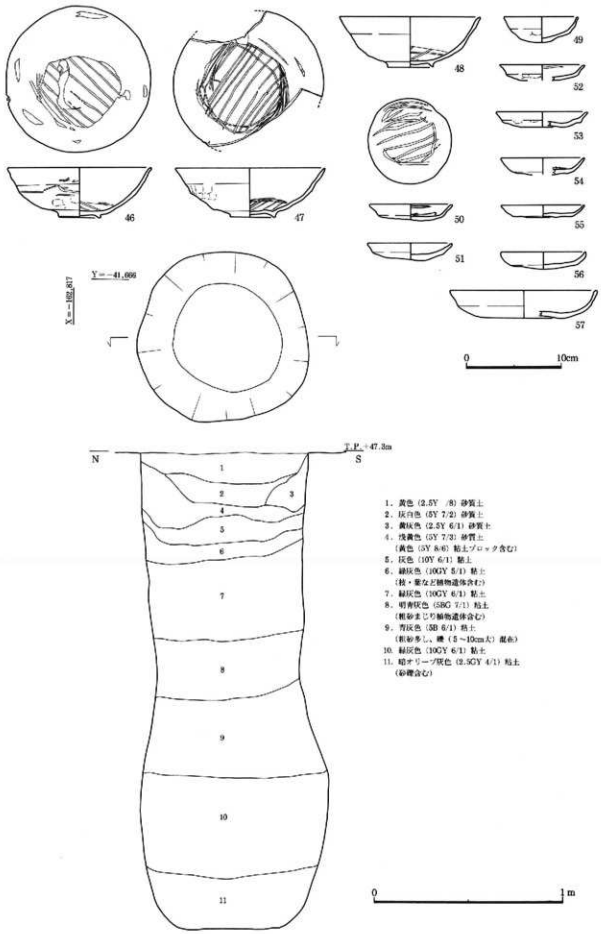
溝群（第23図）　本調査区で検出されたこの時期の溝には、地割りに沿う溝と旧河川の流跡など自然地形に規制された溝がある。前者は調査区全体に多く認められ、その軸方向は座標軸にほぼ合致し、後者は北半部に限られ、自然地形を巧みに利用している。いずれにしてもこれらの溝の大半が耕作に伴うものと考えられる。

地割りに即した溝群

南北方向溝群

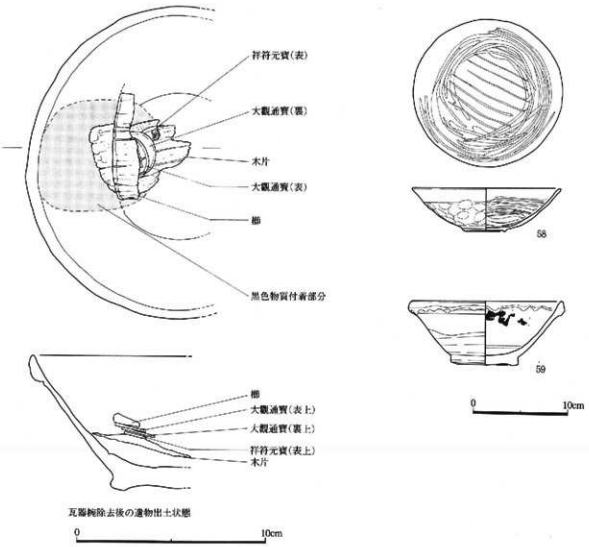
溝600　調査区最北西端で東肩の一部が検出された溝である。深さ0.9～0.1m、埋土は浅黄色（2.5Y7/3）粘土である。埋土中より口縁部外面に段をもつ瓦器羽釜口縁部～鍔部片が出土している。

溝602　調査区北西端で検出した。幅0.28～0.47m、深さ0.06～0.08mを測り、埋土は浅黄色（2.5Y7/3）粘土である。軸はやや東に触れ、N－3°－WEを測る。南半部にみられる整然とした地割りに沿う溝とは若干趣が異なる。河川蛇行部に影響されたこの附近の自然地形によるため



第21図　H区井戸1237平面・断面・出土遺物図

1. 灰黄色（5Y 6/4）粘質土（砂まじり）
2. 浅黄色（2.5Y 7/4）粘質土（砂まじり）
3. 灰黄色（2.5Y 6/2）粘土
4. 暗灰黄色（2.5Y 5/2）粘土



第22図　H区土坑墓687平面・断面・出土遺物図

であろうか。

溝664・685・862・863・864

溝669・671・672・675・683・689・872

この2列に平行する南北溝群はF区の溝360・361、G区の溝530・531に連続すると考えられる。数カ所で重複関係を確認でき、おしなべて東西方向の溝を切って掘り込まれている。すなわち、本調査区の南から溝670、691、715、897などを、南半部中央では土坑墓687そして井戸871を切っている。方向はN－2°～3°－E。両溝の間隔は0.8～1.0m、深さは0.03～0.10mを測る。埋土は南半の664・669・671・672ではにぶい黄色（2.5Y6/4）粘土、北半の682～685・689・872では灰色（5Y6/1）粘土を観察した。

出土遺物としては溝669より瓦器椀底部、675より土師器羽釜鍔部、872より瓦器椀、土師器片、685より土師器片が出土しているが、いずれも摩滅した破片である。

南北の地割り中軸線に沿って連続し、間隔を一定に保っている点で他の溝との違いが明らかであり、里道の側溝と考えることもできよう。またこの溝の連続線上に、たとえばG区の建物105や上記の土坑墓682や井戸871など直接生活に関わる遺構が存在するので、この遺構の出現した頃には建物のいくつか、あるいはすべてが既に廃絶し、耕作地となっていた可能性がある。

溝738・740・761　調査区南半部東側に南北に連続する溝である。前記の東側溝とは約18m隔たっている。幅0.11～0.27m、部分的に幅0.55mを測るところもある（溝761）。深さ0.03～0.14mを測り、埋土は738・740でオリーブ黄色（5Y6/4）粘質土、その北に続く761では灰色（5Y6/1）粘質土となる。方向はN－5°－W。出土遺物には溝761の瓦器椀、土師器片がある。

溝739・743・752・753・766・768・770・787・791

上記の溝の東側に接してやや東に触れる溝である。幅0.11～0.33m、深さ0.02～0.05mを測るが、検出面からは極めて浅く、ために幅も北にいたっては底面を残してほとんど断ち消える状態である。方向はN－5°－W。埋土は前記の溝のそれと同じである。

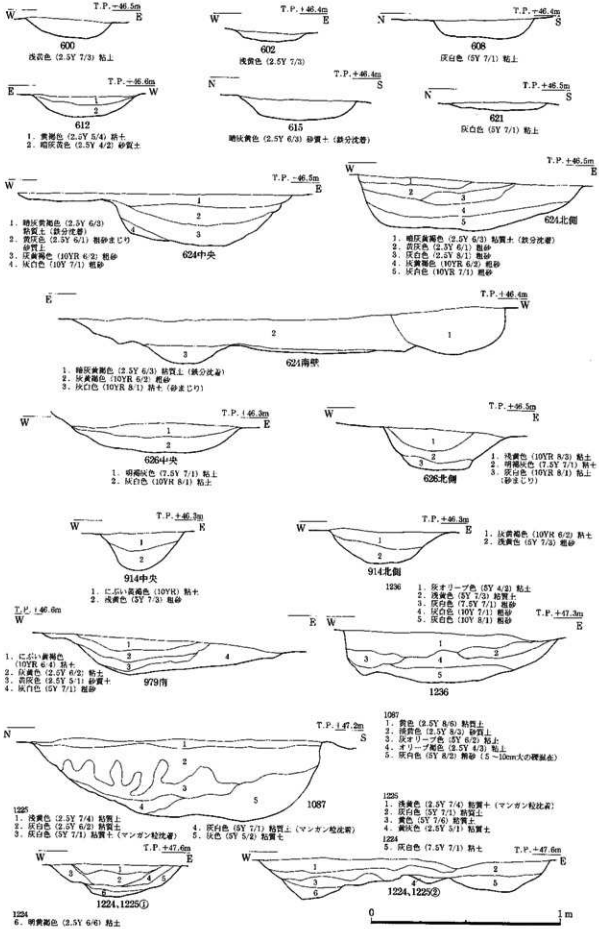
溝1224・1234　幅0.1～0.7m、南端では河岸の傾斜面と下位の溝1225との関係で1.55mと広がる。深さ0.05～0.3mを測る南北方向の溝で、北側が浅く、南側に深くなる。埋土は灰黄褐色粘質土で鉄分の沈着が認められる。溝1224・1226を切っている。

溝1228・1229　溝1224、1225、1234の西側に2.5m隔てて平行する南北方向の細溝で、埋土は灰白色（7.5Y7/1）粘質土である。北端は溝1230に断ち切られている。

東西方向溝群

溝608・621　調査区北西端で検出された幅0.31～0.89m、深さ0.03～0.07m、埋土を灰白色（5Y7/1）粘土とする溝である。方向はN－80°～87°－E。溝624の埋没後に掘り込まれている。621より摩滅した瓦器片が出土した。

溝615・616　調査区北部で検出された東西溝の残りである。615では0.6～0.9m、616では


T.P.+46.5m
600
浅黄色 (2.5Y 7/3) 粘土
T.P.+46.4m
602
浅黄色 (2.5Y 7/3)
T.P.+46.4m
608
灰白色 (5Y 7/1) 粘土
T.P.+46.6m
612
1. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 粘土
2. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質土
T.P.+46.4m
615
暗灰黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 (鉄分沈着)
T.P.+46.5m
621
灰白色 (5Y 7/1) 粘土
T.P.-46.5m
624中央
1. 暗灰黄褐色 (2.5Y 6/3) 粘質土 (鉄分沈着)
2. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘砂まじり
砂質土
3. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘砂
4. 灰白色 (10Y 7/1) 粘砂
T.P.+46.5m
624北側
1. 暗灰黄褐色 (2.5Y 6/3) 粘質土 (鉄分沈着)
2. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘砂
3. 灰白色 (2.5Y 8/1) 粘砂
4. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘砂
5. 灰白色 (10YR 7/1) 粘砂
T.P.+46.6m
624南壁
1. 暗灰黄褐色 (2.5Y 6/3) 粘質土 (鉄分沈着)
2. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘砂
3. 灰白色 (10YR 8/1) 粘土 (砂まじり)
T.P.+46.3m
626中央
1. 明褐灰色 (7.5Y 7/1) 粘土
2. 灰白色 (10YR 8/1) 粘土
T.P.+46.5m
626北側
1. 浅黄色 (10YR 8/3) 粘土
2. 明褐灰色 (7.5Y 7/1) 粘土
3. 灰白色 (10YR 8/1) 粘土
(砂まじり)
T.P.+46.3m
914中央
1. にぶい黄褐色 (10YR) 粘土
2. 浅黄色 (5Y 7/3) 粘砂
T.P.+46.3m
914北側
1. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘土
2. 浅黄色 (5Y 7/3) 粘砂
T.P.+46.6m
979南
1. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 粘土
2. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘土
3. 灰色 (2.5Y 5/1) 砂質土
4. 灰白色 (5Y 7/1) 粘砂
1236
1. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土
2. 浅黄色 (5Y 7/3) 粘質土
3. 灰白色 (7.5Y 7/1) 粘砂
4. 灰白色 (10Y 7/1) 粘砂
5. 灰白色 (10Y 8/1) 粘砂
T.P.+47.3m
1236
T.P.+47.6m
1087
1225
1. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粘質土
2. 灰白色 (2.5Y 6/2) 粘質土
3. 灰白色 (5Y 7/1) 粘質土 (マンガン粒沈着)
4. 灰白色 (5Y 7/1) 粘質土 (マンガン粒沈着)
5. 灰色 (5Y 5/2) 粘質土
6. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 粘土
T.P.+47.6m
1224, 1225①
1225
1. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粘質土 (マンガン粒沈着)
2. 灰白色 (5Y 7/1) 粘質土
3. 黄色 (5Y 7/6) 粘質土
4. 褐灰色 (2.5Y 5/1) 粘質土
5. 灰白色 (7.5Y 7/1) 粘土
1224
T.P.+47.6m
1224, 1225②
0
1m

第23図　H区溝断面図

0.3～0.7mの溝幅があり、深さは0.03～0.09m、埋土は鉄分の沈着する暗灰黄色（2.5Y6/3）粘質土である。

溝691　調査区南端で検出された幅0.14～0.36m、深さ0.02～0.04mを測る溝である。上記の里道の側溝と考えられる溝（664,672）に断ち切られている。方向はN－90°－E。埋土は灰白色（7.5Y7/1）粘質土である。

溝715・771　調査区の南半ほぼ中央で検出された幅0.36～0.93m、深さ0.03～0.08mを測る溝である。方向はN－83°～85°－E。埋土は灰色（5Y6/1）粘質土である。やはり西で上記里道と見られる側溝に、東側では溝771に断ち切られている。この溝を境にしてその北側に建物群や井戸などの生活域を示す遺構が集中する。

溝722・747・803　建物106の南で検出された溝群である。溝722は幅0.22～0.46m、深さ0.04～0.15m、方向はN－90°－E、溝747は幅0.11～0.15m、深さ0.02m、溝803は幅0.85～1.02m、深さ0.02～0.05mを測る。溝722は井戸721の北辺を断ち切っている。埋土は灰色（5Y6/1）粘質土である。上記の溝とは異なり、地形の起伏に左右された部分的な流跡の可能性もある。

溝1052・1054　調査区北半中央で検出された0.3～0.4m、深さ0.15mの溝である。方向はN－88°－E。埋土は灰オリーブ色（7.5Y6/2）粘質土で、土質から見て他の地割りに沿う溝より新しい時期のものと考えられる。1054より土師器、瓦器の細片が出土している。近代井戸1053に断ち切られている。

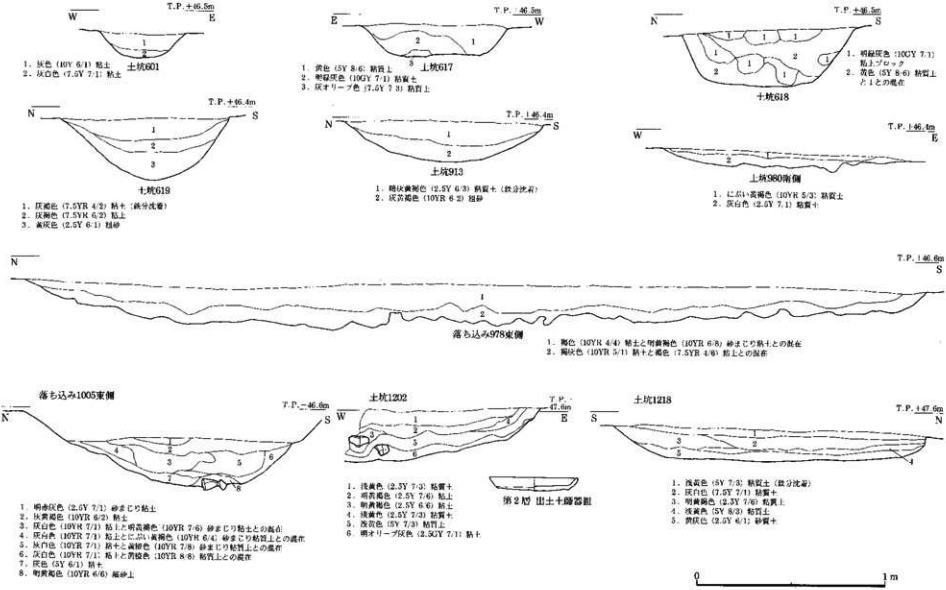
溝1230　幅0.3～0.5m、深さ0.05～0.10mの東西溝である。埋土は東側水路近くでは灰色粘質土、西側の旧河川近くでは鉄分の沈着が目立つ灰色（5Y6/1）粘質土、西側では鉄分の沈着する灰黄色（2.5Y6/2）砂質土である。

地割り以前の自然地形に左右された溝群

溝612　調査区北部で検出された幅0.56m、深さ0.10～0.18mの溝で、2層に分層された。出土遺物はないが、土質土色からみて中世と考えられる。

溝623・624・626・914・915・979・1013　旧河川の流跡が調査区北部で東に振れ始める部分の左岸に接続する溝である。方向はN－12°～18°－W。東西の連結溝によって三本の溝が一定間隔（3.0～3.5m）をとって、平行して北西方向へ延びている。ただし北側では溝626との間隔は1.1mと狭くなっている。河川流跡がここで東北に向きを変えるので、北西部の水の確保を目的としたかも知れない。溝の幅は溝624・979が幅広で0.94～2.11m、深さ0.16～0.32m、溝915は狭く幅0.75～0.89m、深さ0.11～0.17mを測る。しかし埋土の底面には粗砂の堆積が認められる点では3本の溝全てに共通している。重複関係としては不定形で方向もまちまちな620、625、913など自然地形に左右された溝、土坑群の埋没後の掘り込みで、東西溝621に断ち切られている。出土遺物としては623で摩滅した瓦器細片があるのみである。

溝918　溝915の東に掘り込まれた幅0.28～0.44m、深さ0.06～0.11mの溝である。方向はやや


T.P.＋46.5m
W
E
1
2
土坑601
1．灰色（10Y 6/1）粘土
2．灰白色（7.5Y 7/1）粘土
T.P.＋46.5m
E
W
2
1
3
土坑617
1．黄色（5Y 8/6）粘質土
2．明緑灰色（10GY 7/1）粘質土
3．灰オリーブ色（7.5Y 7/3）粘質土
T.P.＋46.5m
N
S
1
1
1
1
2
2
土坑618
1．明緑灰色（10GY 7/1）粘土ブロック
2．黄色（5Y 8/6）粘質土と1との混在
T.P.＋46.4m
N
S
1
2
3
土坑619
1．灰褐色（7.5YR 4/2）粘土（鉄分沈着）
2．灰褐色（7.5YR 6/2）粘土
3．黄灰色（2.5Y 6/1）細砂
T.P.＋46.4m
N
S
1
2
土坑913
1．暗灰黄褐色（2.5Y 6/3）粘質土（鉄分沈着）
2．灰黄褐色（10YR 6/2）細砂
T.P.＋46.4m
W
E
1
2
上坑980南側
1．にぶい黄褐色（10YR 5/3）粘質土
2．灰白色（2.5Y 7/1）粘質土
T.P.＋46.6m
N
S
1
2
落ち込み978東側
1．褐色（10YR 4/4）粘土と明褐褐色（10YR 6/8）砂まじり粘土との混在
2．褐灰色（10YR 5/1）粘土と黒色（7.5YR 4/6）粘土との混在
落ち込み1005東側
T.P.＋46.6m
N
S
1
2
3
4
5
6
1．明赤灰色（2.5Y 7/1）砂まじり粘土
2．灰黄褐色（10YR 6/2）粘土
3．灰白色（10YR 7/1）粘土と明黄褐色（10YR 7/6）砂まじり粘土との混在
4．灰白色（10YR 7/1）粘土と にぶい黄褐色（10YR 6/4）砂まじり粘土との混在
5．灰白色（10YR 7/1）粘土と黄褐色（10YR 7/8）砂まじり粘質土との混在
6．灰白色（10YR 7/1）粘土と黄橙色（10YR 8/8）粘質土との混在
7．灰色（5Y 6/1）粘土
8．明黄褐色（10YR 6/6）細砂土
土坑1202
T.P.＋47.6m
W
E
1
2
3
4
5
6
1．浅黄色（2.5Y 7/3）粘質土
2．明黄褐色（2.5Y 7/6）粘土
3．明黄褐色（2.5Y 6/6）粘土
4．浅黄色（2.5Y 7/3）粘質土
5．浅黄色（5Y 7/3）粘質土
6．明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）粘土
第2層 出土土師器皿
土坑1218
T.P.＋47.6m
S
N
1
2
3
4
5
1．浅黄色（5Y 7/3）粘質土（鉄分沈着）
2．灰白色（7.5Y 7/1）粘質土
3．明黄褐色（2.5Y 7/6）粘質土
4．浅黄色（5Y 8/3）粘質土
5．黄灰色（2.5Y 6/1）砂質土
0
1m

り溝915にほぼ沿う形をとるが、埋土中に粗砂の堆積は認められない。しかしその他の埋土は同様である。方向はN－25°－W。上記の一連の溝に関係する可能性がある。

溝1085　調査区中央で河川の流跡の蛇行部に流し込む形で掘り込まれた溝である。溝1087の埋没後に掘り込まれ、流し込み部分は古代の溝1087にみられるほど河岸に深く切り込んでいない。したがって河川の埋没が相当進んで窪地状となっていた段階に流れ込んでいたと考えられる。軸方向はN－60°－Wに振る。出土遺物には瓦器椀底部片、土師器小皿片、断面層状をなす硬化した熔壁片がある。

溝1122・1216・1225・1226　調査区中央西半部で、北東から南西へ連なる溝である。H2調査区ではN－30°－E、H3調査区ではN－20°－Eの傾きをとる。ピット1117、落ち込み1113、1142、溝1224、1230に断ち切られている。1122、1216では0.45～0.60m、深さ0.15～0.20mを測り、埋土は黄褐色（2.5Y5/3）粘質土である。出土遺物は1122で内底面に粗い平行暗文を施す瓦器椀底部片が出土している。

土坑・落ち込み（第24図）　人為的に掘り込まれた土坑、自然地形の凹凸の結果生じたと思われる落ち込みなど、一定の形をとるものや不定形なものが検出されている。しかし必ずしも遺物が出土していないので、時期の判断が難しいが、土色や土質の点で中世と考えられるものも含め、ここに挙げておきたい

土坑601　調査区北西端、溝600の東隣で検出された1.3m×0.6m、深さ0.13mの土坑で、2層の埋土が観察される。

土坑617　調査区北部で検出され、溝616の埋没後の溜まり状の土坑で、1.2m×0.8m、深さ0.16m、埋土は3層観察される。

土坑618　土坑617の東隣で検出され、連結溝624の西肩を切っている。1.5m×0.9m、深さ0.31m。埋土は黄色と灰色の粘（質）土がブロック状に混在するもので、一時に埋め戻された感がある。

土坑619　土坑617、618の北側で検出された1.4m×0.8m、深さ0.33mの北東～南西方向の土坑で、3層に分けられ、すべてレンズ状の堆積を示す。溝620を切っている。土師器小皿、羽釜底部、須恵器甕体部の破片が出土している。

土坑913　調査区北部の連結溝624の東肩で検出された2.9m×1.05m、深さ0.2mの土坑である。埋土の下層となる粗砂は連結溝の底面にみられる状況と似ているので、そこから溢水の溜まりであったかも知れない。

土坑980　連結溝979の西肩に接して検出された0.2m×1.3m、深さ0.09mの溜まり状の土坑で、2層の粘質土の堆積が観察される。

土坑1181（第25図）　調査区南部の建物109の南7.5mのところに掘り込まれた径0.41～0.50m、深さ0.1mの浅い円形土坑である。埋土は浅黄色（2.5Y7/4）粘質土で、瓦器小皿12点が納

められていた。Ⅲを身と蓋にした1組（同図64,65）を除き、他はすべて底部を上にして土坑底面を覆う形で検出された。

出土遺物　瓦器小皿は口径8.9～9.8㎝、器高1.5～2.0㎝が多く、底部の突出によって2.5㎝になるものもある。いずれも口縁部のヨコナデにより底部と口縁部の間に屈曲がみられる。灰黒色の軟質の器で、砂粒を多く含む。内面は荒れて調整不明。

土坑1202　西半は水路に断ち切られ、東半部のみ残る。長軸は0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は7層に分層され、第3～6層にかけて7～10㎝大の礫が投棄されていた。この土坑は東西小溝1205を断ち切っている。第2層より瓦器、土師器の細片、第5層より内面に淡緑色釉のかかる白磁椀底部片、凸面縄目タタキ、凹面板ナデの瓦片が出土している。白磁椀の底部片は畳付けを磨いて平滑にしており、土坑墓687出土椀と同様である。

土坑1218　調査区南部の建物109北西隅で検出された東西方向の土坑で、西側は水路に断ち切られている。幅は1.67m、深さ0.16mを測り、5層の埋土を観察される。建物の北西の4柱穴に囲まれた範囲におさまる位置関係からみて、建物に関連する可能性もある。平行暗文のある瓦器椀底部、土師器の破片が出土した。

土坑1231（第26図）　この調査区の南端の河岸近くに掘り込まれた土坑である。溝1224の埋没後に掘り込まれ、また溝1230により南半を断ち切られている。長軸1.4m、検出面での短軸の残存長は0.4m、底面では0.4mを確認した。埋土は4層観察され、第2～3層より摩滅の激しい瓦器椀、内傾する口縁端部が「く」の字形に屈曲する土師器羽釜、瓦質甕口縁部が出土した。

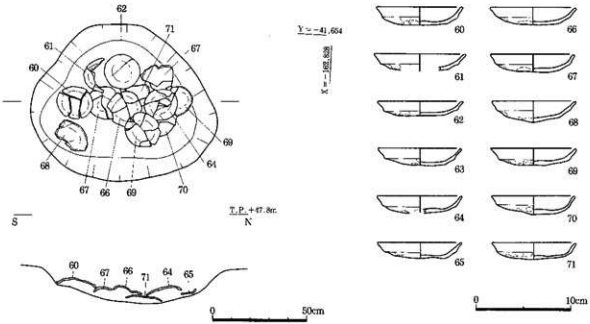
土坑1244（第27図）　建物108の西北3mの河岸斜面に掘り込まれた径0.74m、深さ0.28mの円形小土坑である。埋土は3層に分層される。2～3層にかけて東から西に流れ込んだ状態で瓦器椀1個体（74）が出土した。

出土遺物　口径15.5㎝、器高4.8㎝の瓦器椀は内底面に無秩序で粗くて太い暗文を施し、周囲をやはり粗くミガキ調整し、外面にミガキはみられない。瓦器椀編年ではⅢ－3期に近いと考えられる。

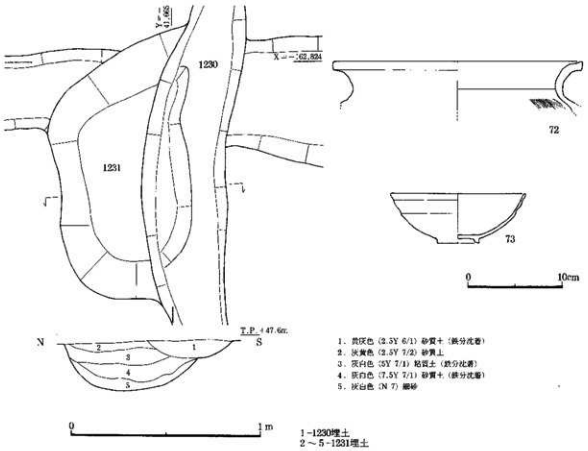
その他の土坑群631～636・644～659　河川蛇行部北側左岸の溝629と641との間の狭長な場の緩傾斜面の黄色粘土面に掘り込まれた土坑群である。地となる黄色粘土が砂礫の混じりのない、きわめて精良な土質であるところを殊更選んでいるように思われる。径は0.50～1.00m、深さは0.2～0.5mで、埋土は灰色粘土と黄灰色粘土が混在し、上面に鉄分が沈着するという点は共通する。出土遺物はないが、周辺の不整形土坑630、643、また溝状の溜まり647では摩滅した瓦器、土師器の細片が出土している。時期は断定できないが、状況判断として中世と考えている。

落ち込み978　調査区北部で検出された東西方向の落ち込みである。幅4.8m、深さ0.25mの溜まり状となる。2層に分けた埋土はいずれも粘土ブロックが混在する。西端では後述する落ち込み1005と連なる。

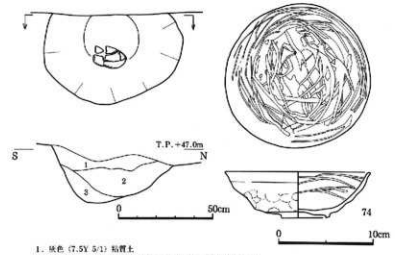
落ち込み1005　落ち込み978の北側に、それとほぼ平行する形で検出された溝状の落ち込み



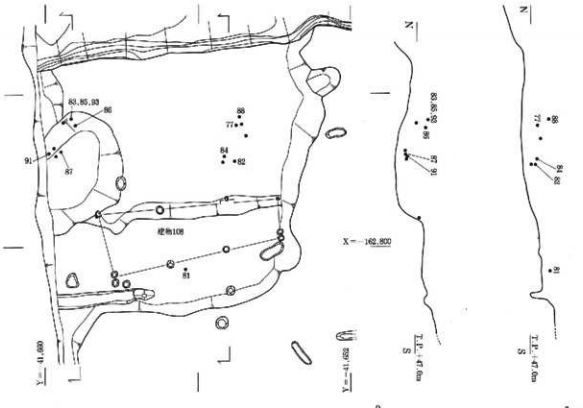
第25図　H区土坑1181平面・断面・出土遺物図



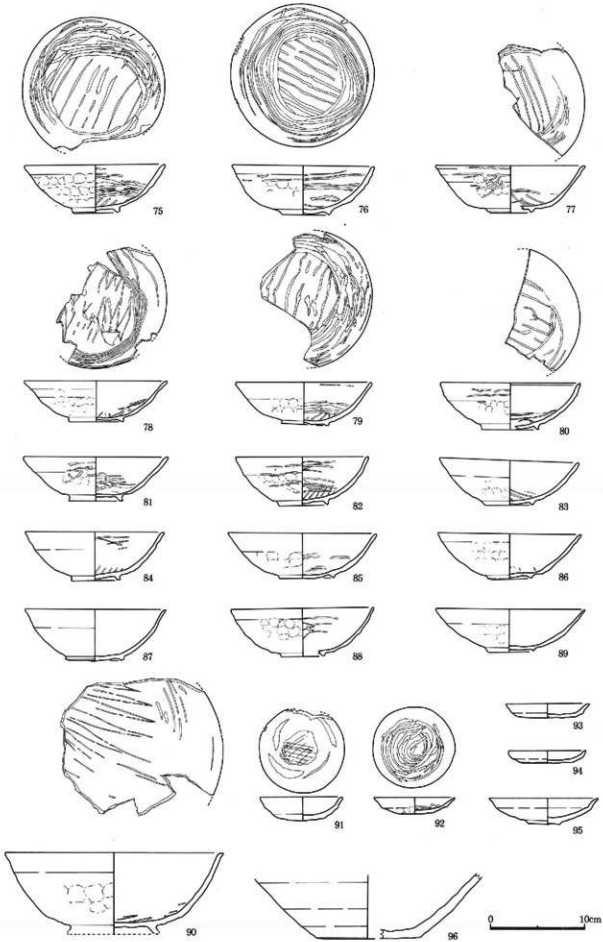
第26図　H区土坑1231平面・断面・出土遺物図



第27図　H区土坑1244平面・断面・出土遺物図



第28図　H区落ち込み1191遺物出土位置図



第29図　H区落ち込み1191出土遺物図

である。場所により底面の高低差が大きい。もっとも深いところでは0.4m程度であり、5層の埋土を観察した。摩滅した瓦器椀、須恵器の破片が出土した。

落ち込み1113　南北1.8～2.0m、東西は5.7m以上を測る。深さは東側（0.06m）から西側（0.24m）に深くなるが、西側では一段落ち込む。埋土は鉄分の沈着した明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土で、出土遺物には粗いミガキを施す瓦器椀口縁部片、ほかの細片、土師器片がある。

落ち込み1191（第28図）　建物108の検出された河岸の緩傾斜面の段差部分を落ち込みとしたものである。建物はこの段差に溜まる灰色（7.5Y6/1）粘質土を除いて検出されたが、この埋土中で東側と西側の2ケ所に土器片が集中して出土した。出土土器類には瓦器椀、皿、鉢、羽釜、須恵器鉢、土師器皿、羽釜、丸・平瓦などの破片がある。

出土遺物（第29図）　瓦器椀の口径は14.0～16.0cm、器高は9.2～9.6cmにおさまる。内底面の暗文は平行状で、中に斜格子状、また無秩序なミガキをかさねるものもある。同じことは皿についていえる。外面は体部上半以上を粗くミガキ調整している。大形椀（90）は口径23.2cm、器高8.65cm、高台は外にふんばる形態である。内面には粗い平行暗文を雑に施し、外面は指オサエのままである。皿（91，92）は口径8.7～9.0cmを測るが、斜格子暗文のある器は他に比べて深みがある。鉢（96）は摩滅した底部片、羽釜は口縁部外面が段状となる形態である。土師器羽釜は内傾する口縁部が「く」の字形に屈曲する形態。土師器皿は底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部が内傾するものと外反するものがある。須恵器鉢は胴部片である。丸・平瓦には凸面に横方向の板ナデと縄目タタキ、凹面に布目と板ナデを施す。瓦器椀の編年にてらせばⅢ－2、3期に相当するかと思われる。

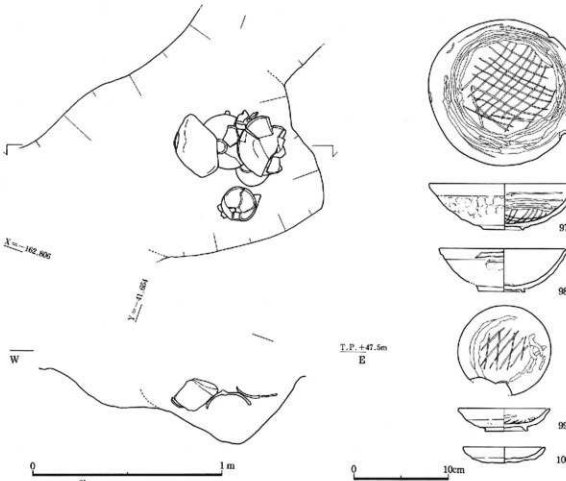
その他の遺構

ピット1117（第30図）　土坑1113の北隣で検出されたピットである。溝1122の東肩を断ち切っている。深さは1122の溝底より深く、0.19mに達し、擂り鉢状に掘り込んでいる。埋土は明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土で、10cm大の石と瓦器椀、皿、土師器皿が出土した。

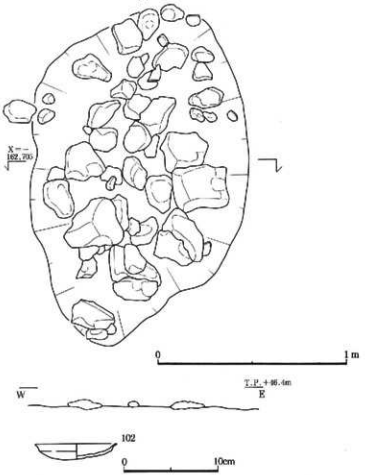
出土遺物　椀は内底面に整った斜格子暗文を施し、周囲に太いミガキをかけ、外面は指オサエのままのもの（97）、平行暗文で口縁部付近に粗いミガキをかけるもの（98）がある。皿も同様に斜格子状の暗文で高台を付すもの（99）がみられる。土師器小皿は淡灰色軟質の器で、ヨコナデによる底部と口縁部の境が明瞭である。瓦器椀編年のⅢ－2，3期に相当するかと思われる。

ピット1140（第31図）　建物109の東辺柱穴1139に南接する径0.4～0.5cm、深さ0.8mの掘り方である。埋土は5層に分けられるが、埋め戻した状況が観察された。また埋め戻しの最後の段階に納められた瓦器小皿1枚（101）が第1層から出土している。建物109を建てる際、あるいは廃絶する際の儀礼的行為に関係するピットとも考えられるが、ここに分記した。

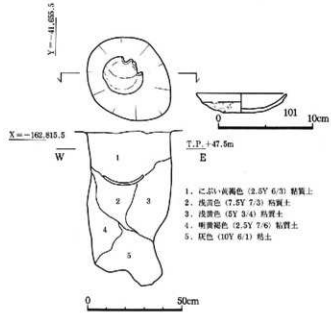
出土遺物　椀は内底面に整った斜格子暗文を施し、周囲に太いミガキをかけ、外面は指オサエのままにしているものと、内底面に平行暗文、外面の口縁部付近に粗いミガキをかけるものと



第30図　H区ピット1117平面・断面・出土遺物図



第32図　H区集石627平面・断面・出土遺物図



第31図　H区ピット1140平面・断面・出土遺物図

がある。皿も同様に斜格子暗文で、高台付きの例品である。土師器小皿は淡灰色軟質の器で、ヨコナデにより底部から口縁部の立ち上がりに段が生じている。

集石627（第32図）　H１区の北部の連結溝の915の南側で検出された。掘り込みはなく、0.55m×0.90mの楕円形の範囲に、主に10～15cmの礫を集めている。これらの石に少量ながら摩滅した瓦器片が混在し、中に皿の破片（102）がみられた。

旧河川流跡628・1601（第33図）　前回の調査ではほぼ南北方向に延びる河川跡が検出されていたが、今回の調査ではH区で大きく東へ向きを変え、右岸が調査区外に及んで東に張り出した後、再び大きく北西へ（N－20°－W）と反転してから、調査区北端では緩やかに北北東へ（N－20°－E）振れている。東に大きく向きを変える部分の地山がそれ以南の粘土や粘質土ではなく、隆起した段丘礫となっている。また建物106～108の柱穴が掘り込まれた部分も同様に段丘礫上面である。流れはこの南北２箇所の段丘礫層の隆起の間隙を下刻し、蛇行部が形づくられたと思われる。

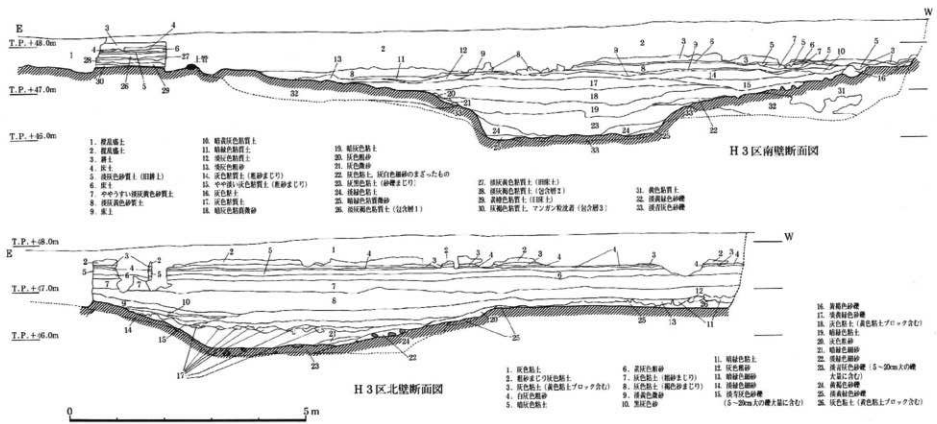
河川堆積の観察結果は前回と変わりなく、中世遺物を含むのは灰色～灰緑色系の粘土層で、それより以下では出土遺物はない。遺物の内容は今回の調査区全体に堆積する中世包含層出土遺物と大差なく、生活域に近い部分に比較的遺物の出土が多い点も前回のD区の調査結果と似ている。したがってこの調査区でも河川堆積層の内、中世遺物が混入する第18層（H３区南壁断面）、第８層（H３区北壁断面）は少なくともまだ完全に埋没しきっていない状態であったことを反映しているといえよう。その段階で取水あるいは排水利用に供する溝（溝1085、914、626に連なる一連の連結溝など）が掘り込まれた。またそれ以前の段階でも既に古墳時代中期に取水利用の溝（溝629・1087）の掘削がみられる。

流跡幅は11～12mを測るが、北側では右岸が調査区外に及んでおり、その一部の傾斜変換点を確認できたにすぎない。横断面の観察はH３調査区南壁とその北側に設けた東西ベルト、H１調査区西壁（第３図）、同調査区北側東西ベルトにより行った。うち、南壁断面では花粉分析に供する土壌サンプルを採取した。H３調査区は旧住棟の建設や解体時の攪乱を相当受けているため、良好な河岸のラインを追うのは困難だったが、岸辺に打設された杭の一部が残っており、これを結ぶことによって左岸ラインをほぼ想定できる。河川がこの調査区の北部で大きく東に蛇行するのは、北側の左岸に高まる段丘礫層を迂回しつつ北流した結果であると考えられる。

中世以降

井戸905　建物108の北側の河川蛇行部の河岸に掘り込まれた円形の素堀り井戸である。検出面より1.8mまで膨らみの軽い胴張り状に掘り込まれている。埋土は青灰色粘土のみで、須恵器の細片が１点出土した。しかし埋土の状況から見て中世以降の可能性が大きい。

井戸1053（近代）　調査区北半で機械掘削の時点で検出された円形の井戸で埋土は現耕土と同じである。出土遺物はない。深さ１mまで掘削した。



第33図　H区田引川推算土層図

第5章　まとめ

狭山池から北に流れる東西両除川の間には中位段丘の可耕地が開けている。大阪南部に特有の年間降水量が少ない風土は、この地の潅漑を困難にしてきたが、大小多数の溜め池を築くことでそれが克服されてきたといわれる。過去のこの歴史的事実に目をむけるとき、当調査地点の土地がどのように耕地として開発され、潤されてきたか、まずこの点を発掘調査から得られたデータに基づいて検証することがもっとも基本的な課題と思われる。そこでこの課題に対していまのところ思い描いている調査地点の遺構の変遷のイメージを模式的に示し（第34、35図）、若干の説明を加えて概要のまとめにかえたい。

古代から近世にいたる開発の根底に一貫してみられるのは、耕地の拡大とその潅漑、つまりどこから恒常的に水を確保するかという問題意識だった。当調査地点で検出された遺構の変遷にうかがわれる人間集団の動静は、まさにそのための営みが地表に投影されたといってもよい。

古代では自然地形を克服しようとする志向がうかがわれても、結局は自然地形を部分的に利用するほかなかった。その頃はまだ流水があったとおもわれる河川から導水したようであり、たとえば、溝629・1087や、溝924、昨年度のD区溝281などはその痕跡とみられる。またこの時期に建物や井戸といった生活臭い遺構は2年度にわたる調査の中でも、まったくみいだされなかった。その点からみても、腰をすえた開発はおこなわれなかったと考えられる。それだけ自然環境面でも、それを克服できる社会経済的側面でも、まだ不安定要素が多かったといえよう。

中世、特に13世紀は周辺でも遺跡数の増大が指摘されているが、余部遺跡（その1）の地点もこの現象の一貫として浮上してくる。遺構分布のありかたは、それまでとは違い、自然地形に左右される部分が残るとはいえ、基本的には条里の地割りに適合させている。それが現在の地籍図にみられる1町四方を基本にしている点では、近代の余部地区のほぼ原形をなす時期である。遺構の存在する区画に、地籍名を該当させれば、居住域と耕地、さらには貯水個所の輪郭がよりはっきりとする。「樋ノ上」、「八反田」の境の弧状の南北ラインは一町四方の区画を外れるが、これはかつての河川の左岸であったためで、自然地形の克服し難い名残りとして現在もこの個所の道路の形状にうかがわれる。「樋ノ上」の地籍の中で西に約18間分張り出した、河川部分を除く一町四方で検出された建物・井戸それに附随する畑地の遺構は、一単位の屋敷地の体裁をとって、実に整然と営まれていた印象を受ける。その中には墓のある屋敷地もみられる。

屋敷内の建物は棟を東西に向けるものがほとんどであるが、建物109だけは南北である。これは旧河川がゆるやかに東に蛇行していく個所にあたり、その分西側に余地がないためのやむえない処置であったろう。だからここでは家屋は基本的に東西方向をとっていたとみてよい。その理由のひとつとして風向きを考えておきたい。建物群の時期のうえでの先後関係はそれほどはっきりしていない。しかし占地の違いに注目すれば、地山の硬い礫層が隆起する旧河川の岸辺よりは安定した場を占める屋敷地B（第35図参照）が、あるいは当初ここに定住したムラびとの家屋で

あったかも知れない。次いで旧河川に接近して建てられるようになると考えたい。

いずれにしても建物群の時期差は前章でみたように大差ないと思われるが、かりにあったとしても居住域の一定区域への占地がすでに一町四方内で定まっていたことに変りはない。重要なのは、13世紀前半にきわめて計画的に占地されたムラがなぜここに出現するかである。古代には安定した土地ではなかったが、この時期になってこのムラが出現する背景には、古代に比べれば住むに安定した条件がととのった、あるいはととのえられた。つまり、ここに定住して耕地の養生にいそしめる手法がこのムラに住う集団全体にすでに共有されていたからだ、と考えられる。

河畔で生活を営むのに季節的な冠水は避けられない。特に、河床が高いといわれる西除川流域ではなおさらである。しかし、古来農耕を営むのに、かえってその冠水を利用する事例は多い。その意味では13世紀前半にようやくムラとしての形をとって河岸地帯へ進出できる状況が醸成されたといえる。ただこの頃、調査区で検出された河床は厚い泥土の堆積にみられるように、すでにかなり高くなり、常時流水がある状態ではなかったようである。この状態の河川から導水する、H区北部の連結溝群には底面に粗い砂の堆積が認められ、それが付近の土坑や窪みにもみられることからして、季節的には氾濫した形跡もうかがわれる。しかし河川の埋没過程全体からみれば、徐々に停滞していく状況があった可能性は高い。この時期の河川はおそらく河川から谷池へ移り変わる段階で、ムラびとは天水と西除川左岸からの分流とをここに貯水し、これを周辺の耕地へ配水していたのだろう。

13世紀中頃以降、この池端ムラの状況は一変する。ムラの屋敷地がなくなり耕地となって、かつてのムラの中に里道（P28で述べたように溝664・685・862・863・864と溝669・671・672・675・683・689・872が里道の両側溝と考える。かつての屋敷地の墓や井戸を断ち切っている）が南北に通る頃、住まいは他所に移る。その候補となる場は、おそらく東方の調査区外に求められよう。

かりにそうであるなら、東への移動は、西除川左岸への進出という新たな状況が展開し、谷池を利用した貯水池以外に西除川左岸からの直接取水が可能になり、それを管理し始めた結果だったと考えたい。ここに池端ムラは川端ムラへと変貌する。そしてこのムラが近代の南余部の集落そのものの前身となっていく。

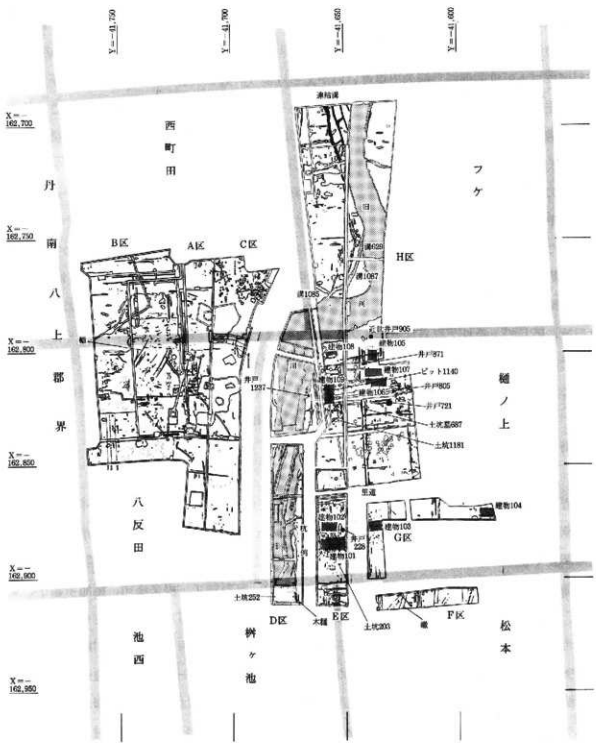
調査地点でのその後の状況は、別の形でも確かめられる。昨年度のD区では池の埋没し切った平坦面に径0.5～0.6m、深さ0.15mの小土坑が掘ってあり、そこには16世紀の土師器小皿が蓋と身の合わせにして3組納められていた。埋没した後の谷池のさらなる土地利用に先立って、地鎮めの儀礼を行なった痕跡である。季節的な貯水の氾濫や日照りのないことを願って、谷池を新たに嵩上げする地業に付帯する遺構と思われる。この土坑の時期より遅れて、やはり谷池の埋没平坦面に松の幹を縦割りし、芯材部分を溝状に荒削りした樋が南北方向に設置されていた。そしてその樋とほぼ同じ位置に上方から掘り込まれた撹乱坑があり、そこにコンクリートの埋設管が布設されてあった。この位置はかつての「桝ヶ池」との間の堤（現在は高層住棟前の道路で、地割り坪境にあたる）の下に暗渠として設けられたものである。その位置が地籍「樋ノ上」の中にお

さまっている。また旧河岸に打ち込まれた東西、南北の杭穴の並びが地割りラインに沿った形で旧河川の埋没平坦面上で検出されたが、これらはもはや近世～近代へ連なる地割りに合わせて池辺を長方形に整形する作業の一端を反映している。このような16世紀の状況はいわゆる皿池への変貌ということができるかもしれない。

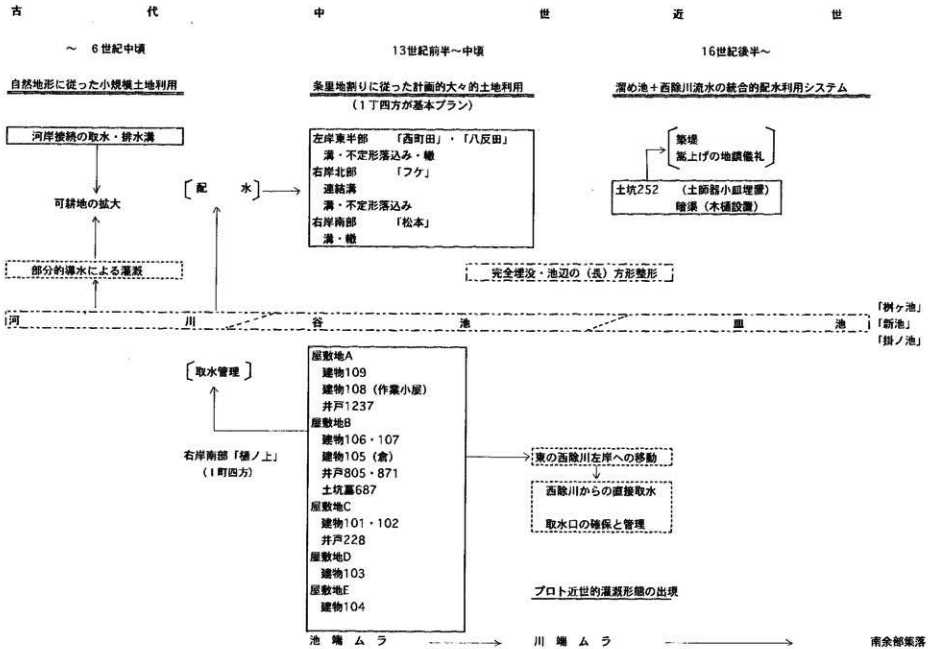
以上のようにみると、屋敷地とその池端立地はここでの中世的灌漑形態として理解され、一方屋敷地の消滅と耕地への変貌、くわえて西除川左岸への進出、そこでの新たな川端ムラの出現は、いわばプロト近世的灌漑形態の出現といいかえられよう。近世文書に描かれる狭山池下流域の、西除川左岸の統合的な配水利用システムの萌芽をそこに求めるのは無理だろうか。ここで検出された遺構の多くをこの一連の灌漑史の中に位置づけてこそ、南余部の遺跡の性格の特徴づけが際立ってくるように思える。E調査区の土坑203には牛（馬）のものかと思われる下顎骨が2点の瓦器椀のうえに置かれていた。屋敷地があった頃の遺構である。牛馬の部位が水にかかわる宗教儀礼の中で象徴的に用いられる事例を念頭に置けば、それが降雨・止雨いずれの祈願であろうと、これまた灌漑と結びついてくる。気候、地形などの自然環境にきたすさまざまな形の劣悪な条件を精神的にも克服しようとする、ムラびとの宗教儀礼的行為の痕跡であるにちがいない。

13世紀には中世村落が急速に広がっていくといわれるが、規模・内容は古代以来の土地毎の自然環境に応じて、それぞれ異なるニュアンスをもってわれわれの前に浮き上がってくるはずである。それを類型化して土地利用の変遷を美しく説明するまでには、現実の過去のムラの姿はまだまだとらえ難い意外性を秘めている。ここにあえて描いた模式図も、限りない事実のほんの一面についつい目を奪われて、本質からはほど遠い理解ではないかと、調査担当者として危惧している次第である。識者諸賢の御批判を仰ぎたい。

調査の過程で、下記の方々に有益なご教示をいただきました。（敬称略・順不同）。包丁道明（美原町教育委員会）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、西田孝司（松原市市史編纂室）。現地調査や整理作業では以下の方々のお世話になりました（順不同、敬称略）。荒井民、岡恵子、貝川晶子、笠井美鈴、川濱聡子、島内洋二、進藤智美、高野純江、根来隆司、堀池多嘉子、東英美子、宇澤ヒデ子、江藤豊子、大矢ノリ、奥野容子、川東貴子、河本直子、神吉タエ子、北村美紀、古下佳代子、高野綾子、中辻三沙穂、西澤寿子、細川真弓、堀口友里、増川順子、矢柄あさ代、矢野早苗、山下美佐子、山田洋子。なお、現地調査の途中、一時本課広瀬雅信主査、西川寿勝技師の援助を受けました。余部遺跡（その1）の成果については上林史郎技師からいろいろと教示をいただいたが、まとめに生かせることができなかった。後日、改めて検討し直すつもりである。整理作業では地村邦夫技師の多大な協力を得て、滞りない作業を進めることができました。ここに記して以上の方々に心よりお礼もうしあげます。



第34図　検出遺構と地籍との関係図



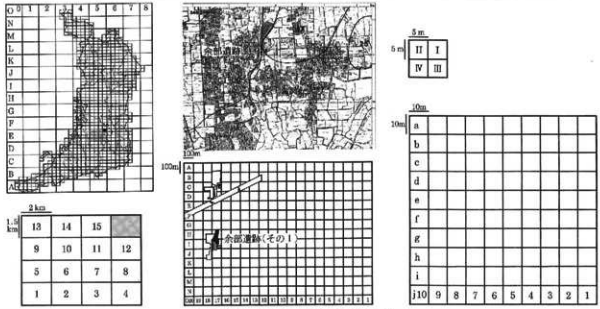
第35図 調査区の土地利用の変遷模式図

報　告　書　抄　録

ふりがな	あまべいせき　　はっくつちょうさがいよう
書　名	余部遺跡（その１）発掘調査概要・II
副書名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	枡本　哲
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	大阪府大阪市中央区大手前二丁目　06－6941－0351
発行年月日	1999．3．31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
余部遺跡 （その１）	大阪府 南河内郡 美原町 南余部 281番地外	27385	18	34° 31′ 51″	135° 32′ 46″	平成10年 7月7日 ～ 平成11年 3月31日	7,600m²	府営美原南 余部住宅建 替工事

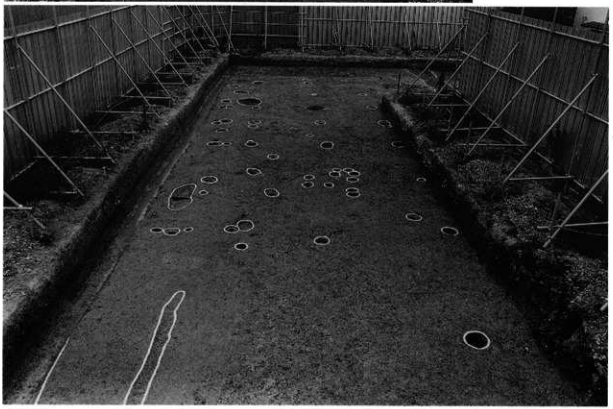
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
余部遺跡	集落	鎌倉 室町	掘立柱建物 井戸、墓	瓦器・瓦質土器 陶磁器	



余部遺跡（その１）地区割表示図

図　　版

F調査区全景（西→東）



E調査区西部遺構群（建物103付近）（南→北）

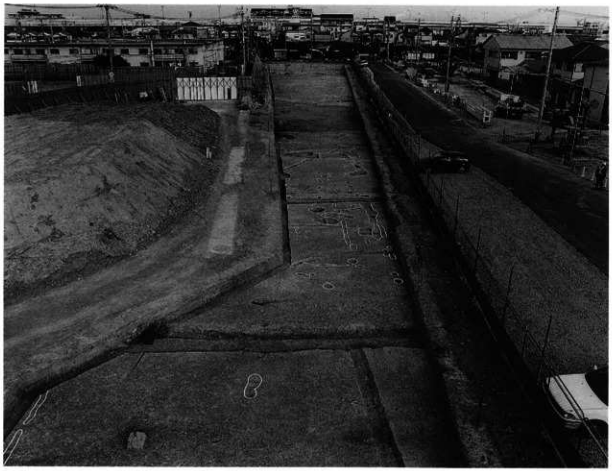
H１調査区全景（南→北）

H１調査区北半部（南→北）

H２調査区南端部（建物 109 付近）（南→北）

H３調査区南半部（建物 109 続き付近）（南→北）

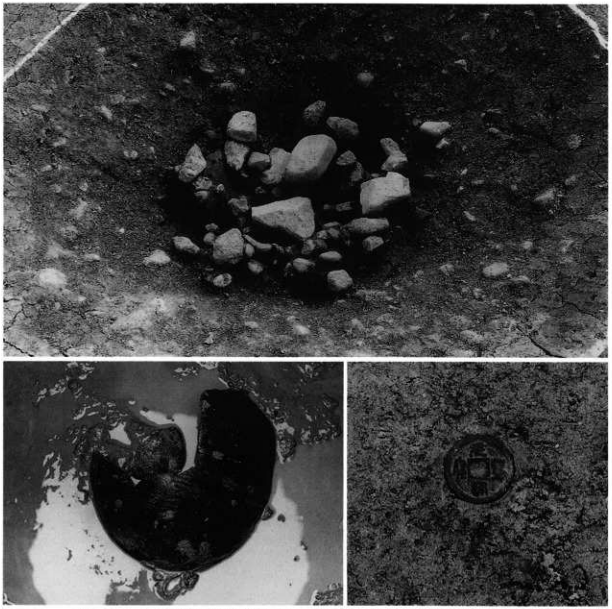
H１調査区建物105－106付近（西→東）



H２調査区全景（南→北）

H調査区土坑墓687遺物出土状況（北→南）

同土坑墓687出土白磁碗内銭貨、椰露出状況



H調査区井戸721遺物出土状況（上―第1層、下右―同検出面上、下左―第5－6層）

H調査区土坑1181遺物出土状況（東→西）